7396

小武勇傳

52

錦城齋貞玉口演

今村次郎記

山中武勇傳

夜警文庫第十七篇

東京

朗月堂發行

山中左衛門

悪劇

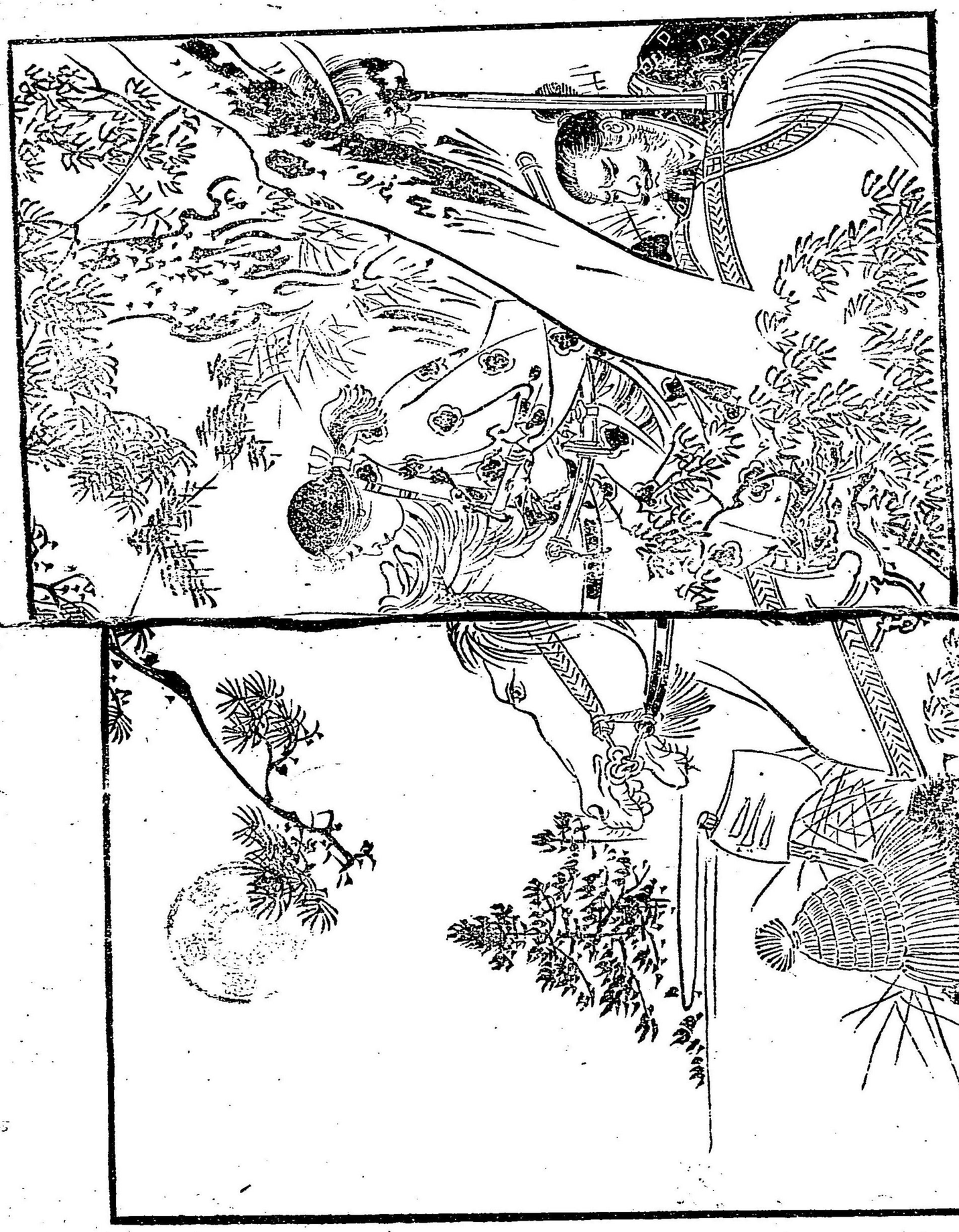
明治堂蔵版

東京

明治十年六月十五日

序

人生一涯僅かに五十年なりといへども其些なる霜の間に於る有爲轉變は實に糾へる繩の如く榮枯盛衰禍福幸凶必らずしも定まる可らず旦れ喜びは夕の憂となり昨日の樂しみは今日の苦しみと變ずる中山左衛門が櫻狩の樂しみの半を驚の爲に愛子を攫へれ歡樂は忽ちち哀情と變じ搗て加へて愛子が腰にせし短刀の敵の手に落て爲に暗主の疑いを被せり終に其の身は自刎に伏し妻は發狂し家は潰れ尚悶れにも妻と娘が乞食の境界に落るに至り昨日の榮華ハ仇となつて禍災交も來る其の哀れさハ實ハ筆紙の盡す所にあ



らず然れども正直なる者は天一度びも災いを下すこと能ども又之を救ふ時あり終には一旦悪鳥にさらはれし小兒も怪力勇子となつて其の仇を復すに至る禍福吉凶の轉回する事宛然廻り燈籠の如しと廻らぬ筆を無体にもかきまはす爾り

竹廼舍主人記

特8
52

山中武勇傳

錦城齋貞玉講演
今村次郎速記

第一席

これ此度講演いたしまするは山間の勇士と題し復讐譚にして時代は少しくお古くはありますが其の話の脚色は數多き仇討物の中にも珍らしき御話にて手前儘々寄席に於て口演いたし例も喝采を博しまする處から此度書林のお求めに應じて口演する事と相成りました抑も事の濫觴より說き出だせば茲に近江國松江の庄の領主松江判官藤原秋季といふは勇氣活達の御方にて南朝に對して淺からざる勳功のありし處より明德三年南北朝の御和談相濟んで後江州の松江へ所領を賜はり數多の

家臣を有して其の家繁昌致して居ります領主秋季の奥方は元南朝の御所に仕え和歌は勿論糸竹の道にも達し賢女の聞えある上に容貌楽に勝れ才色両全の婦人とは斯る人をば差して云ふかと思ふ位名を花の方といつて秋季よりは五ッ六ッ年下でございまを尤とも秋季には後妻でございまして先妻は氏王丸といふ一子を遺して病死を遂げられ氏王丸が八才の時に花の方を迎へられたのでございまをけれども花の方は前に申す通り頗ぶる賢女で氏王丸を愛でる事實の子の如く少しも隔てなく茲に四ケ年の星霜を経て聰永の七年となり氏王丸が十一才秋季初めて四十の春を迎へました然るに其の年の二月十五日が恰も秋季が誕生日に相當いたしますので家臣等を集め初老を祝ぶく爲に盛んなる祝宴を催はされ殊に奥方お花殿のお好みとて家臣共へ對して祝いの歌を詠ませ賀筵の當日開講い

たすはづにて其の前日松寄祝といふ題を出だされましたされば日頃歌道に志ある者は道は能き御沙汰こそ下れりと喜ぶに引替へ其の道に暗き人達はよしなき事を奥方が言い出だされたと迷惑に思つて居ります領主秋季殿も乱世に人と成られた御方ゆえ武藝の心得は充分ありますけれども文道の事には去のみ達けて居られませんから餘り興ある事には思召しませんが奥方のお好みゆえ之を留めるも如何と其まゝに捨置れました然るに當日文台の役に當りましたのは當家の重臣山中左衛門正春といつて其年四十五才是は性來潔白にして仁義の道を重んじ家中無二の忠臣といはれ武藝は申そに及ばず文藝の嗜なみも深く和歌は京に有名の去る歌人の弟子とかり頗ぶる名譽の者でございまをから奥方の勧め辞し難く評者の役を勤める事に相成りました扨愈よ當日となり勇て定めの刻

屋には家臣一同御殿へ出仕に及び秋季殿に於ては氏王丸を從がへて正面の御席に着れまして頓て山中左衛門は次の間より徐々と文台の上へ數多の懐紙を載せたるを恭々しく持て夫へ進み出で主君の左りの方へ座を占めました是に續いて家臣の面々兩側へズラリ袖を連ねて列座に及ぶ奥方には簾の内に數多の侍女共を從がへて披講の樣子を見て居られまする立て列ねたる金屏風に万燈の如くに点じたる燭台の光りの輝やき渡る有樣は實に不夜城と怪しむばかり一同座席定まりましたるを見て山中左衛門主君の方に向つて一禮あし扨段々と詠上る歌何れも皆心を籠めて君の万歳を祝する其の文字數は同じけれども心は已がさま〳〵にて何れ疎かといふはなく早や半ばは讀み上ましたが其の中に星合梶之助輝雄といふ者の詠みたる歌の上の句だけを左衛門正春詠み掛て如何なせしか其の

まゝ下の句を詠まゝに懐紙をば膝の下へ入れて終いました秋季殿之を見て不審に思召して居る中に左衛門は其の次の懐紙を取て讀み上やうとしたから　秋「コレ〳〵　左衛門其方梶之助の詠める歌をば半ば讀み上て下の句を讀まゝ其儘下へ取除けたるは如何なる譯じや之まで他の家來共の詠みたる歌は悉ごとく讀み上げながら梶之助の出だせし懐紙のみを取除けるとは其の意を得ん事じやが仔細あらば申せ此の時左衛門助も下げて　左「恐れながら星合梶之助が詠める歌に就ましては左衛門聊か所存がござりますれば夫れに依つて披講を差扣にましてございます何卒此の義は御見逃しのほどを願い度う存じます　秋「ナニ梶之助の歌に就て其方所存あつて披講を差扣えたと如何なる所存あるか苦しうない夫に於て申せ斯る席上に於て見逃すといふ事は出來ん速やかに其の譯を語れと少し

く御氣色を替へて仰せられると座の中央に扣へて居りました星合梶之助ズカ〳〵と進み出でゝ　梶「アイヤ山中氏には甚だ合点往かざる歌し方歌多き歌の中にて某しが詠みたる歌に限り披講を省かるゝのみからも其の懷紙を文台の上にも置かれざるは心得難し只今殿の仰せらるゝ通り如何なる所存がござるか憚かる所なく君前に於て仰せ聞られたい然らざれは斯く申す某し殿の御不審を被むり朋友の手前も面目なしサア速やかに其の理由を承たまはりたいと眼に角立て左衛門に詰り掛りました此の有様を見るより座中の面々互いに顔見合せ何ぴとも席上も開け渡つたる様子此の時左衛門去も迷惑に　左「左はかりの仰せなれば是非に及ばず一通り其の次第を言上仕つる梶之助も夫に在て聞れよと彼の懷紙を取り上げて聲高々と

我か君は末の松山はる〳〵と

と讀上げ　左「恐れながら此れは甚だ不解の歌と心得まする其譯如何とあれば我が君は末と續けたるは最とも忌べき詞にして又流れて留まらぬ砕けて消やすき波の歌に君が齢をよそいたるは就の心に協い申さぬ苟くも評者として斯る不解の歌を讀んで御聽に達するは甚はだ恐れ入りまするが故に取除きまして御ざいまも如何に梶之助此の山中の申も所解事あるか盲い分あらば承たまはらんと今は憚かる所もなく速やかに申述べたるに流石の梶之助もハッといつたまゝ返答に詰り赤面なして下俯向て扣えたる様子之を聞玉ふが否や固より短氣の秋季殿忽ち怒りを發して席を立たれズカ〳〵と前へ進まれ星合梶之助の袖取て夫へ引据え　秋「己れ輝迚我が文事に疎きを御ぞり不解の歌を詠じて主人を嘲弄なす所の無禮狂の骨身にと

たへて覺へよと鉄骨の扇子を取直し丁々發止と打据えられ醫切れて髪は乱れ額の疵よりタラ〳〵と頬の邊りへ流るゝ血汐いと見苦しき有様に並居る所の人々も日頃より梶之助の後慢を憎み誰一人殿へすがつて詫び入る者もなく下俯向て見ぬふりをして扣えて居る秋季は梶之助を夫へ打据えたるまゝ元の所へ着かれ　秋「左衛門其方梶之助を引立て早々目通りを遠ざけるやういたせとの殿命に已を得ず山中左衛門梶之助に向つて　左「如何に星合氏其許の歌を詠ぜしは評者の役目に依つて是非もおし必らず某しを恨み玉ふかイザ殿の仰せなれば早々に此の席を退ぞかれよ猶豫いたして猶々殿の御怒りを増して」は相成らんといはれて星合梶之助何の答へもなく左衛門を尻目に掛け恨ましげなる様子にて悄然としてお次の間へ下りました後ろ姿を見送つて一同の者は顔と顔を見合せて只茫然た

るばかり一言も發する者おく奥も一堅たる此の折に　秋「ア、左衛門祝いの席に斯樣ある事は不吉じや歌の披講は追ての事とし席を換て酒宴をいたもであらう一同の者酒の對手申附ると氏王丸の手を取て其の座を立たれ奥殿差して立入られました早や酒宴の用意は完分整のつて居りまもから夫より奥方も御同席にて賑はしく御酒宴を開かれ何れも御酒下されがあつて名々祝詞を述べ其の夜は目出度く相濟みました扨翌る日に相成るとお花の方は秋季殿の前へ出られて　花「昨日梶之助の詠めし歌と申すを妾も承たまはりましたるが右に忌はしき歌と申もには無之も彼の金葉集の賀の部に載せたる永成法師の歌なるを梶之助は日頃より負けぬ氣性の男ゆゑ此度歌を詠まざれば其の無能を人に誹られん事を厭つて扉風なぞに張りたる色紙の類ひに書きし松に寄せたる祝歌を見て金葉集の歌とは

知らぜ其の心も稼々悟らぜ上の五文字を作り替て左も歌詠み顔に懐紙へ記して出せしは賊に愚かしき者にございます夫を山中左衛門は承知いたせしゆゑ取除けしを上の仰せに已む事を得ず席上にて彼の歌をば難じましたれども永成法師の歌といふ事を申しおば梶之助に歌盗人の悪名を取らせねばおりません夫を氣の毒と思い彼の小町に先名を負はせたる黒主の昔語りとは事違り賊に仁義の至し方、左衛門あろ賞むむべき者にございまそと奥方の言葉を聞いて秋季も扨は左様であつたかと共に左衛門の志ざしを感じ改めて御秘蔵の鳩丸といふ短刀をば褒美として山中左衛門に遣はされ梶之助は謹しみ仰せ附けられました扨夫より一月ほど經ちまして頃も弱生の中旬近江滋賀の里といふに名代の櫻の名所がございます今しも花は満開と聞いて山中左衛門は或日妻の柏木と共に今年十二才

にある娘の小君と五才の男子三之助を輿物に乗せ二人の腰元と三人の下僕を供に従がへて滋賀の里の花園へ櫻狩を催はしました留守居には用人の春瀬由良之進といふ賊に忠實やかなる老人を置き瓢破籠おその用意をいたして朝のほどより出掛けましたが幸い天氣も長閑にて人出も中々にございまする様子早や花園へ近く參りましてより二人の子供を籠より下ろし妻の柏木と左衛門が自身が子供の手を取り彼方此方と今を盛りに咲出でし花を眺めて居りまする内に所々に幕を張り中には琴を彈ぜるもあれば三味を彈くもあり或は唄ひ狂する者もございまして頗ぶる賑いでございます

左衛門も都かなる處へ用意の幕を張らせんと彼方此方と場所を撰んで居る處へ遙か向ふより四五人の侍に前後を守らせ數多の特女を従がへたる上臈若君を伴ひ行列靜かに參られた

るを見るより左衛門妻に向つて　左「那れへ來玉ふは奥方に若君定めし此の花園へ櫻狩に參られし事と思ふ我々此の所に居るは恐れあり此方へ參れと其の所を立去り滋賀の川越の方へ來つて景色の良き所へ幕を廻し毛氈を敷き用意の分盆おどを取り出し左衛門は柏木を初め供の男女を對手に酒を酌みながら四方山の景色を眺むるに此所は花園よりは半路ばかりも隔だり俗を離れて又一層の風景でございまを一子三之助は今年五ツの愛盛り標色の綸子に寶尽しを色入に染め出したる小袖を着し先頭父が拜領の鳩丸といふ短刀を差し手に山躑躅の枝をもつて頻りに蝶を逐ひ鋏もを姉の小君が　小「アレ三之助動物の命を取てはおりません其のやうに駈廻つて轉ぶと惡うございますと止るも聞ず三之助は男の子の事ゆゑ喝し喜こび鋏方此方を駈け廻る有樣を酒を飲みながら父の左衛門は打見や

り　左「コレ〳〵小君留るには及ばん五ツ六ツは惡戯盛りと下世話の比喩にも云ふ通り盲つ盛りの男の子斯樣な場所に大人しく沈着て居るやうでは却つて往ぬ今日一日は十分に樂しませるが宜いと我が子の健やかなるを喜み餘念なく遊び戯むれる樣を見て共に樂しんで居る折しもフト後ろの山の方に當つて笛の音が聞えまする扨はと思つて左衛門後ろを振返つて見る中に段々近く山を下つて來る者は二三人の草苅童何れも草籠を背負つて居りまを中に一人の童子は牛に跨がり朔りに笛を吹て參りまする左衛門之を見てコレ〳〵と手招きをいたもヒバラ〳〵と夫へ參り牛に乘たる小僧も共に飛下りて來て　○「伯父さん何だエ　△「何だエと幕張の前へ突立ち上つて中の樣子を差覗く無邪氣の体を見て左衛門が　左「其方達が能う草苅に參るゆゑ此の菓子を遣はすぞと紙へ載せて菓子を遣ると

小僧は喜こび有難う〳〵と牛を傍への樹に繋ぎ貰つた菓子を分配して食べて居ります然るに三之助は子供が牛に乘て來たのを見て自分も牛へ乘らうといふのを侍女共が「坊ちやま御危ないふでございますモウ〳〵」が怒ると大變でございますからお止し遊ばせといへども聞き三「忌ぢや〳〵坊ももう〳〵に乘つて遊ぶのだと泣きわめきまするゆゑ子に甘き左衛門左コレ〳〵女子ども農家に藝おいし牛は柔和なるものゆゑ三之助の望みに任せ其の牛に乘らせたが宜い「左樣おらば」と彼の童子に牛を引き出させ侍女が三之助を抱き上げて其の牛へ乘らせんとする時柏木が「柏「坊よ其のお腰の物は危ないゆゑ誰ぞに渡したが宜いといふと三之助は頭を振て三「イヤ〳〵お父樣のお馬に召すやうに坊も刀々を差して乘るのでございますといふゆゑ夫も子供の心に任せ牛に乘せると固より牛といふ

ものは平常は柔おしいものゆゑ子供を乘せてノソリ〳〵と歩行て居りまを三之助は手を打つて喜こぶ樣を左衛門夫婦は見て共に喜こんで居りましたが早や其の中に日も西山に傾むいて來ましたから暮ぬ中に立ち歸らんと取り數したる飯笥分盒などを片付けて三之助をも牛より下させやうといたしたる時遙か向ふの山の方より一陣の風サッと吹き起り吹き揃ひたる櫻の花は雪の如く一時に飛ひ散る有樣アレよ〳〵と人々の立ち騷ぐ中に何處より飛び來りしが年經る大鷲翼を振つて勢ひ鋭くく翔り來りアワヤといふ中牛に乘つたる三之助を掴み虛空遙かに飛び上つたる有樣左衛門是を見て大いに慌ろき刀をつ取り駈出し木の根岩角の嫌ひなく飛び越へ〳〵雲井に鷲の行く方へ遙ひ行く跡には妻の柏木聲を放つてワッとばかりに泣き叫び宛然狂氣の如くに相成りましてこけつ轉びつ良

夫の後に續いて追ひ行けども固より足弱の女の身息切れあして長くは走れず空を睨んで身をもがへ足をつま立て手を延しアレよ〳〵と叫べども翼を持たぬ人の身の其の甲斐更にございませんん惘れあるかな三之助は胸の邊りを掻き裂かれたるものと見へ懐中に差入れたる白紙に血染に染つてヒラ〳〵と飛散つて參り三之助は手足を振はしもがき苦しみヒー〳〵と泣き叫ぶ聲がかすかに耳に入り母の柏木は尚更に憂いを增し悲歎に餘つて氣を失ひハタとばかりに例れました娘の小きみは夫へ駈け附け柏木に確かと抱き付き　きみ「母ア様氣を確かに持て下さいまし三之助をお父様が今に逐い附き取り戻してお出でにあるに相違ございませんからどうぞ母ア様氣を確かに持つて下さいましと子供あがらも健氣な小きみ聲を限りに母の耳許に口を寄せて呼びまする其の中に侍女下

僕も追々に駈せ集まり谷川の水を汲んで參りまして顔に引掛け御新造様よ母様よと聲々に呼び生れば漸々少しく人志も附きましたる様子兎に角も幕の中へお連れ申して御介抱申上げんと侍女下僕大勢來つて抱き上げ幕の中へ連れ歸り用意の藥を服ませたり或は脇中を撫させる種々介抱をいたしまする此方は左衛門餘程の道を逐ひ行きましたが何にいたせ翼を持たぬ人の身の地の上を駈せて參りまするに先方は虚空を飛んで行く鳥の事ゆゑ迚も逐い付く事は叶いません手を空しく立ち歸つて參り妻柏木の体を見て又々驚ろき夢現の如き心地して今日一日の櫻狩の樂しみは惘れ無情の嘆きと代り力なく〳〵娘の小きみと諸共に柏木を駕籠に乘せ自分を始め一同の者乘物の前後を取卷いた我家を指して歸る道も若やと思ひ樹々の梢に目を配りながら悄然として屋敷を指して歸りの道に就き

ました

第二席

遂に又星合梶之助は前日山中左衛門の爲めに我が詠歌を罰せられ主人秋季の怒りに觸れ多くの人中に於て打擲をせられ悉とく恥辱を受けたるのみならず謹慎申附られたるに夫に引替へ山中左衛門は當日の褒美として秋季より秘藏の鳴丸の短刀を下し賜れしと聞き己れの惡きを顧みず只左衛門を深く怨み已に一月餘りも閉籠つて居りましたが何分主君の許しがございません愈よ心中に邪推を起し是も左衛門の讒言に據る所と思ひ何卒して彼に憂目を見せて此の怨みを報はんと種々に考へて居りましたるが何にいたせ已れは閑居の身でございますから左衛門に出遇う便りもございません此上は如何なして

呉れんと夫のみ案じ煩らつて居りまする抑も此の梶之助といふ者の素性を尋ぬるに播州灘ケ濱といふ所に漁師の笘六といふ者がございまして其の者の伜で年若の時より武藝を好み性來小賢しき者でございますから己れの才を頼んで兎角に人を輕しめました年端も住かぬ内から酒を好み女を愛し漁る業を全でいたしません親父は固より無能の者であるから漁師なぜをして一生を送るも滿足であらうが俺は是はぜに才藝ある身を以て竿を握り網を取り板子一枚下は地獄といふ小舟に乗つて危うき業をして今日の營業をするは好ましからずと二十才の時に兩親を捨て國を立退いて夫より諸國を遍歷ふし其の間武藝も大分に上達をいたし五年以前に故あつて當家の家來と相成りましたされば今年は丁度三十に成相りますかまだ定まる妻もなく只鶴といふ孩を手許に置き家内は僅か六七人の暮し

をいたして居りまを今日しも梶之助は庭に腰掛を出し、夫へ酒肴を取寄せ安座をかいてをり一人グビリ〳〵酒を飲んで憂を晴して居りまするとと垣根越に人の話聲が聞えまするのを何氣なく聞くと一人は憂で自分が怨んで居りまする山中左衛門の下僕六助の聲でございまを何を咄をかと思ひ垣根の邊間からソッと窺がうと六助は手に徳利を提げて居るのは前町へ酒でも買いに行つた歸りと見にまも何やらん荷物を背負た男に向つて

六「今日は御主人様御夫婦共と小供衆を連れあそつて花園の花見にお出でなすつたから歸りは大方夜にあるに違ねあいから用があるあら又明日來るが宜いといふと彼の商人が

○「左様でございますかお詫らへ物の事に就て少々申上げたい儀がございまして態々參りましたがお留守とあれば越あろでございません何れ又明日にも上りませうといつて左右に別れま

した梶之助は又元の腰掛へ歸つて酒を飲みながら考がへて居たがア、忌々しい左衛門めは夫程打連て櫻狩をして樂しみするに俺は彼奴の爲めに此通り謹慎中で何日になつてもお許しは出すに出してはいはれないが短慮愚昧の主人秋季彼の讒言を信じ此の上又如何なる罪を此の梶之助に宛行ふも知れない左衛門が如き鼠輩の爲めに金玉の身を過またんは愚の至り今偖らすも彼が他行いたせし事を聞しこそ幸はい宵嘯の間紛れに左衛門めを只一打に切殺し日頃の恨みを晴して呉れんと忽ち悪心を茲に生じ庭下駄をはいて立上つたる折しもあれ彼の三之助を攫いたる大鷲が此所を飛行きたるものか三之助の腰に帶びたる彼の鳩丸の短刀鞘を拂つて空中より落來り梶之助の額を掠つて手水鉢の側はらある水の根へグサと立ちました梶之助は吃驚いたし何であらう今パッと先つた物が天

より落て來たやうだがまさか流星でもあるまい……何者か我が庭内へ物を投込んだに違ひないと不圖彷はらを見れば今いふ通り木の根に光り飼ぎら短刀が立つて居りまするから扨は と思い取上けて見れば月毛主人秋季の秘藏なしたる鳩丸の短刀は正しく主人が中山左衛門に與へられたる鳩丸に相違ない然るに今空中より落來るといふは如何にも訝かしき事なりと短刀を熟々と打眺めて暫らく思案をして居りましたが忽ちニッコリと打笑み 梶「此の飼の不思議に我が手に入つたるは之正しく天の賜物なり噂に聞けば花の方氏王殿を迎られて今日しも鶴鳴川の下屋敷に玉り玉いしと承まはる歸へりは確かに二更の頃にも相成るべし、一筋道の地藏坂に待伏せなして氏王殿の乘物に此の短刀を打込まば山中左衛門に疑がいかゝり固より愚かの左衛門あれば物腹あず

は必定あり然る時は我が手を下ろさずして彼の家の滅びるを素知らぬ顔にて見て居るは暗討あるよりは遙かに勝る計畧是に越したる事はあらじと一人呟やく後ろの方に何時の間に來りしか妾の鵲彼の腰掛の所に來つて居りまする又彼方には下僕の折平といふ者の庭に掃除に參りましたものと見えて垣根を隔つて今梶之助の呟やきたる獨言を聞いたして居る樣子三人思はず顔見合せ中にも梶之助は慌いて手早彼短刀を袖に隠し左あらぬ体にかさゝぎに向 梶「オヽかさゝぎ何時の程に其方は是に參つた早や日暮にも及びたれば是より彼方の小座敷に到つて改めて酒を酌むはぜに酒肴の用意をして參れといひながら先に立て離の小座敷へ參ましたかさゝぎも直ちに肴を直し自から小座敷へ是を運び主人の酌をいたし又自分も盃を受け暫らく樂んで居ましたが此かさゝぎといふは元大坂の者

で成る浪人者の妻の妹でございまして今日を貧しく暮す姉婚の許に世話に相成るを氣の毒に思ひ切ては貧苦の助けにもなるやうにと密かに姉と相談の上假親を頼み素性を隠して梶之助の所へ奉公に來て居りまするので安こそいたして居りまするが心立至つて宜しく容貌も勝れて居り年も若うございますから梶之助も大層氣に入つて居りましたが今庭に於ての獨言を聞しかと氣に掛り、梶「コレかさゝぎ今此方が庭に於て秘密の事を喋やきたるを其方は定めし聞いたであらう……決して隱ずには及ばん聞たあれば聞たと由せ　かさゝぎ「ハイ……イエ別に何も承まはりはいたしません　梶「ナニハイイエ別に聞かんといふは訝しな返事……アー聞いたといつては惡いと思ひ左樣に返事を猶躊いたすと見えるが固より我が枕の塵をも拂ふ其方に如何なる密事を聞れるとも決して仔細はないあれ

ども決して人に語れぬ密計を聞かれて其儘に捨て置くは此方何分にも心掛りに相成るゆゑ聞いたなれば聞いたで宜い必ら其方抽者に對して二心がないといふ誓紙を書いて與れるやうに別に何も案ずる事はない只此方の心ゆかせ他言もしまい仮令此方に如何やうな事があらうとも決して二心はないといふ事を書いて與れゝば夫で宜いのだと言葉を和らげ申しまそるから顔を上げ　かさゝぎ「ハイ恐れ入りました誠に不思義の御縁にて昨年の冬の頃より貴所樣のお側に仕へ淺からぬお情けを蒙むり有難き事に心得て居りまする仮令如何なる事がございましても人に語るおそゝいふ事はございませんされども君は是が他より漏れましたる時は手前をお疑がいに相成るも如何心に愛りある印しに仰せの如く誓紙を認めて差上げまする ゆゑ只今部屋へ參り認ためて參りまそると其の座を立たんと

いたしまするを　梶「イヤ〳〵　別に部屋に參るには及ばん料紙硯は只今是へ取寄せるゆゑ此の場に於て認めるやうにと自身に庭へ下り飛石傳いに庭下駄を踏鳴して隔てに構へたる折柴戸を開き　梶「コレよ丑平は居ぬか丑平は居ぬか急れと大きな聲を出しまするとき「ヘエー」と答へて丑平といふ下僕が夫へ出て參りました梶之助は柴折戸の所に立つて丑平を近く呼び何やら暫し囁やき元の所へ立歸つて參りました頃て丑平が料紙硯箱を持つて參りまして樣側の端へ置き其儘丑平は立去つて終とう　梶「サア誓紙の文言は別にくだ〳〵しい事を書くには及ばん妾事過世の緣深く君と妹背の睦をかもからは仮令如何ある事ありとも二心を懷き申ませしく後日の爲め一札差入れ申す誓紙件の如しとして其方の名前を記し別に宛名は書かんでも宜いかさ〳〵ぎは一々梶之助の云が儘に書き是で宜しうで

さいますかと誓紙を差出しました梶之助手に取つて讀下し梶「宜し〳〵是で其方の心底も相分つた先づ安堵して是へ參り快よく酒を飯もひやうにと手を取つて側へ引寄せたかと思ふと忽ち髪を掴んで夫へ引倒しましたから驚き　かさ〳〵「アレ何で左樣な事を遊ばしまもぞうぞお許し下さいましと泣叫ぶを委細構はず梶之助は膝立直して左の手に其の髪を握り右の手には彼の鳴丸を持ち飼ぞき眼を見開つてハッタと睨み　梶「如何にも其方は我が讐敵といたする所の山中左衛門の弟筭作と云ふ者の妻の妹なる事を承知いたした其方が今宵の樣子日頃とは異なり何か忠實〳〵しく我れに仕へるは我が密事を細やかに聞かんといふ計畧に疑がいあし姉に聚がそ緣に依て今宵の密事を山中の方へ知らさん爲めの下心とは我が此の明かの眼にて見貫いたり汝に誓紙を書かせたるは我が一ッの計畧老

いたる羊の如き身をもつて虎の髯を捻らんとおもふ白痴者此の一刀の引導にて地獄へでも極楽へでも思ふ勝手の所へ行けと雪を欺むく胸元へ氷の如き彼の短刀をグサとばかりに刺通せば鮮血サッと迸しり藻屑を染める唐紅此世からある血の池地獄劔の山に登されて身を裂かるゝが如きの有様に苦しき息を吐いて

かさ〳〵き「殘念や口惜や是まで御身の惡業を見に附けても開くに付けても疎ましく思いしゆえ疾くにも暇を取らんと思ひ居たりしに今宵計らぬ山中左衛門殿を失なはんとの惡計を聞知つたるを幸はひに態と心を許さん爲め忠實〳〵しく仕へしに早くも夫を悟られて邪見の刃に貫かれ命を取らるゝ口惜しさサア殺さば殺せ仮令此の身はズタ〳〵に切らるゝとも魂魄此土に留まつてやわか此の恨みを報はで置くべきと肩を鬪む斷髪間顔に亂るゝ黒髪は月を遮

ざる青柳の目も當てられぬ有様でありまと梶之助はセヽラ笑い

梶「エヽイ愚圖〳〵世迷言をいはずとも念佛の一遍も唱え て往生しろ此の世の暇取らてし呉れると振袖の袂を口に捻込み咽喉をツプと一えぐりかさゝぎは息も絶々に相成りまして手足をもがき七轉八倒恨みをいふも口の中サッと吹來る無情の風に庭の櫻と諸共に哀れ果敢くもかさゝぎの命は露と散失せました梶之助は血汐の滴る劔を提げて榊先に立出で軒にかけたる風鈴を取つて急しく振鳴すと此の響きが乘ての合圖と見え彼の下僕の丑平最前かさゝぎと共に密事を立聞おしたる下僕の折平を高手小手に縛しめ猿轡を食はせ夫へ立出でました折平は血刀を提げたるを見て益々驚ろく無念ともがくを丑平が縄を取つて

丑「ドッコイ野郎さうは往かねへモウ斯うなつて終つちやア幾ら逃げやうと思つても一寸も此處を動か

す事はおらねへェ、且那様仰せの通り折平めを新の通り縛つて參りましたどうおりとも思召し通りなさいましとドーンと夫へ突飛ばせばガックリ前へのめる所を梶之助は縁の上より打下ろす一刀の許に折平の首は前へコロ〳〵ゴー、梶「ウム出來した丑平最前汝に語つた如く密事を聞かれたかさゝぎ折平斯う手にかけた上からは手術を以つてかさゝぎに書かせた書紙に折平といふ宛名を加へ彼等二人を不義者と偽はり死骸は彼等が親族へ引渡すやう其方宜きに計らつて呉れ拙者は是より地蔵坂へ龍り越し氏王丸の歸りを待受け計畧を施こすゆゑ忍び妻の用意をせよと惡漢二人が森に惡事を牒し合せ程もあらせず二更の鐘に梶之助氣も急かれ彼の鳩丸は服紗に包み て隱し持ち黒さ頭巾に黒小袖身輕の支度に及びまして暗を幸はひ我家あがらも忍び足にて庭傳ひ竹の生垣を押分けて屋敷を離れて足早に地蔵坂へと走行きました

第三席

此の日松江判官秋季殿の奥方花の方は氏王丸を伴ひて花園に到り此所彼所と見廻りて櫻を賞し又は多くの里人が花に浮れて戯むれ狂ふ樣子を御覽になむて大きに心を慰さめられ夫より鶴鳴川のお下屋敷へお出てに相成りました此所には兼て用意もいたしてありまするから書院に花筵を敷連ね花の方氏王丸と共に錦の褥の上に座し玉ひ傍はらに扣へたる侍女共は思ひ〳〵に今日を晴と若飾りましたから此所にも花の咲きしかと疑かふばかり此のお下屋敷に於て樣々の御遊びに時移り黄昏の頃に至つて御歸館といふ事に相成りました花の方に氏王丸は輿物に召され家來共前後を警蹕いたして鶴鳴川のお下

屋敷をお立山でに相成り稍中央はと參りまするとロはドツプリと暮て終ひましたるに此方は星合梶之助前回に申上げたる通り黒扮裝の身輕に支度をし密かに我家を忍び出で地獄坂といふ所の並木の松に攀登り今やくと待つ内に遙か彼方の方にチラリくと火影が見えましたから扨は氏王丸の來りしかと枝の茂みに身を隱し熟て用意の手裏劍を持つて身構へおがら後の明火の近附くを見れば氏王丸の行列ではございません百姓共が松火を振照し何か高語しをいたしながら其所を行過ぎました扨は百姓共の爲に欺されたか夫にしても今宵お下屋敷にお泊りには相成らぬ是非とも御歸館にあるといふ事を聞いて居るが最早是へ參らねばならん笹と又暫らくの間待つて居りまするとロ堤の上に提灯の光り輝やき行列正しく來るを見れば是ぞ花の方氏王丸の同勢に相違ございません

段々と近附いて參りまするから梶之助松の枝に身を隱し相待つて居りまする處へ丁度氏王丸の輿物が其の前を行過ぎんといたしまする處を茲かりと思つて右の輿物を目掛けヤツとばかりに彼の鳩丸を手裏劍に打掛けたるに狙い違はず輿物の窓を打破つて氏王丸の肩先に差通りましたキヤツといふ聲に供の侍大きに驚ろき提灯を照して輿物の戸を開いて見れば這は如何に氏王丸の肩先に短刀を貫ぬかれ血沙が烈しく流れまする樣子供人等是を見て益々驚ろき一方は御介抱を申上げ又若侍達は曲者を捕へんと其所か此所かと馳廻れど松の上に梶之助の潜み居るといふ事は分りません梶之助は仕澄したりと思ひ倒も身を潜めて樣子を窺がつて居りまするとロ氏王丸の傷は急所を除け存外淺傷でございまするゆゑお供の内に醫者も居りまする事ゆゑ早速藥を用ひ傷を包みまして花の方の輿物

へ共にお乘せ申上げ片時も早く御歸館相成るやうにと供人等一同まりにおつて興物の前後を警護し館を差して足早に立歸りました梶之助は此に人々の遥かに行過るを見て松を下り是も我家を差して歸らんとなしたる時に突然木立の茂みより現はれ出でし一人群を成し掛き梶之助の尻を取つてグイと後ろへ引きましたからダヂ〳〵ダヂと梶之助引かれながらに振返り様子を見れども暗おれば其の扮装も分りませんおれども尋常の者ではないと思ひましたからんと口を閉て物をもいはぬ心の中にキッと思案し何程の事もあるべき只一打にふし臭れんと刀の柄に手を掛て引抜かんとなしたるを彼も透さず尻を取つてこじ上げたれば流石の梶之助も堪り兼て前の方へのめらんといたせしを危うく踏留め力を籠て振放ち際もあらせず切附ける刀の稲妻閃めく

を彼の者はヒラリ体を轉し松を木楯に窺がひ居る梶之助は空を切つて氣を焦ち打損せしが殘念と思ふ心の乱れ足石の地蔵に行當り扨はと切込む拜み打佛の袈裟掛怨まちに火花はパッと飛散つたり此の間に彼の者は梶之助をヅロリと見て探り寄つたる手の先に障るを捉つた小袖の袂瓦ひの機みに引切る袖は後日の証據ともおらぬ無紋の黒染も洗へば分る善惡邪正梶之助は其の間に跡暗ませて逃失せましたお話し別れて茲に又山中左衛門は一子三之助を慮に捕れ其の日も暮て漸々に我家に立歸つては參りましたが妻の柏木は歎きに沈み全るで病人の如くに相成り其の儘臥床に入りまして娘の小君を初め侍女共大勢の者銘りに介抱をいたして居りまを左衛門は家來の春瀬由良之進を招ぎ今日の次第を物語るに由良之進も打驚ろき何と主人を慰さむ言葉もなく是も涙に暮れ居りまする處へ侍

女の内にも是らく召仕つて居りまする八重みきと申しまする二人の者一間より顔に袖を當てヤクリ泣をしながら夫へ立出で參りましたが左衛門は前へ出ると其儘夫へ泣伏して終いましたあいに其方共何で是へ來つて其のやうに嘆いて居るかといはれて一人か

八「只今三之助様のお平常召のお小袖のお袂より蒲英の花の切れましたのと樹の實が出でました是は明日お庭内をお遊びの時積取つてお袂の内へお入れなさいましたのでございまそが積まれた蒲公英の花はまだ枯れもいたしませんに三之助様は那のやうお事になり面影の目先に見えまして何々悲しくなりましたが奥様に知れてはなりませんと思い涙を忍んで是へ參りましたと言差して又夫へ泣伏しました左衛門も是を聞いて腸も切れるばかりあれやも男の事でございます

るから涙を忍び由良之進に打向つて

左「只今其方を招いたるは餘の儀ではあい彼の三之助を攫ひたる大鷲は必定澁賀の山中に棲むものと思ふゆえ片時も早く彼の山中へ分登り鷲を射留めて我子の仇を返し切て彼の死骸の内食殘されたる所もあらうと思へば夫を持歸つて葬むつて遣どしたく存ぜるゆえ早々其の支度をいたすやうにと聞いたる由良之進も氣を勵ましし由左様あれば手前もお供をいたし今宵の内に山中へ參り鷲を退治て若様の敵を取るやうに仕つりませうと早速に夫より心利いたる下僕共に其の事を傳へましたるから何れも血氣は逸る若者共手前共御供をいたさんと各々支度に及び山中左衛門は狩裝束に身を固め換弓手槍等の用意をいたし由良の進を初め七八人の下僕共をも從がへて道を急いで初更の頃ほひ澁賀の山へ分入りまして下僕達は松火を振照し谷を渡り峰を越に

此所彼所を尋ね廻りましたが更に鷲の行衛も分らぬ三之助の死骸もトンと目に觸れません空しく時を移し其の夜も早や明近く相成りましたるから詮術なく麓に來つて里人に就て樣子を尋ねると此の近傍の山には鷲の棲んで居るといふ事を里人も知る者がおいといふ事を聞いて益々力も拔け形ばかりは殿めしく拔裝つて居りましもるがスコ〳〵として我家へ立歸りました。

第四席

主人の立歸つたる樣子を見ると家に殘つて居りましたる年老いたる下僕が慌だしく門外へ走り出でまして

○「エヽ御歸り遊ばせ早速申上げますが昨夜旦那樣がお立出でに相成りました跡へお館からお重役樣がお二人方お出でにおりまして御主

君より火急のお召しゆえ早々旦那樣に能り出でるやうにとの仰せでございましたが其の事を申上げるも如何と存じ只御不在の趣を申上げました處お二人は何やらお話におつて其餘お歸りになりましたスルと又暫らく經つて慌だしくお出でにおり此度は旦那樣の行先を殿しくお尋ね由良之進樣の事までもお調べになりましたゆえ由良之進樣はお供をして參りましたが其のお出での先は手前共は辨へませんと申上げましたるとお二人のお侍が案内もおく奥樣のお部屋へ立入り御病氣の樣子を見て其儘驚ろいて立歸りました何卒かは一向手前共には分り兼ねますがどうも樣子が怪しう存じまするゆえお歸りを待つて居りました聞いて左衛門心中に大きに怪しみ角に兎内へ這入つて狩裝束を脱捨て衣類を着替て由良之進に妻の柏木の事を用心させ自分は朝飯を濟ませ兎に角主君が

火急の御用といふは如何なる事かと左衛門は昨夜氏王丸が御歸りの途中傷を受けたる事は未だ辨まえませんから彼の鳩丸の短刀に依て己れの身に大事の來る事とは露知らぬ早速に御前へ出仕いたしましたる處秋季殿直ちに左衛門をお召出しに相成り左衛門御前へ出でゝ樣子を見ると何とおく御主君には御怒りの体面に現はれて居りまするゆゑ如何なる事かと恐るゝ平伏をいたし御挨拶を申上げやうとする暇もおく秋季殿は彼の証據の爲めに留め置いたる鳩丸の短刀を取出して左衛門の前へ投出し秋左衛門其方は此の短刀に覺えがあらうハッといつて左衛門が不審おかしに覺えのある鳩丸でございますから大ゐに驚ろき能く〳〵見ると生々しき血汐が染つて居りまそるから愈よ驚ろきあがら是は如何なる事にでございまするかといはせもあへず

秋季は胸息を押除け臂を張つて山中をハッタと睨み　秋「何事とは何だ昨夜氏王丸櫻狩の歸途地藏坂の邊りに於て何者とも知れず夫ある短刀を興物に打附け肩先へ手傷を負はした其の短刀は先頃其方に與へたる鳩丸あるがゆゑに正しく汝の仕業ならんといふ者もあり予も又左樣に思ふ夫とも何ぞ言譯あるかどうぢや左衛門恐れ入つて夫へ平伏をいたし　左「恐れながら仰せには候らへども譜代重恩の御主人へ對して爭でか此の左衛門が左樣ある大惡を働らきませうや此の短刀の儀に就て　秋「默れ〳〵　此の場に至つて如何やう汝が言譯いたせば　左「是なる短刀が何よりの証據あらぬや人の心は疑り易きもの昨夜の騒動他聞を厭いて隱し置きたりと雖ども重臣の身として聞及はざる事はよもあるまじ然るに昨夜近習共を其の方屋敷へ同度までも遣はせしに其方家に居らざるは何お心中

に一物ありと覺えたり譜代重代の恩を忘れて我が一子氏王丸を殺し已れ此の家を乗取らんといふ下心あるに相違あい最早差許す事相成らん覺悟に及べといいながら立上つて已に御佩刀に手を掛け左術門をお手打にも相成らんとする樣子此の時最前より障子の陰に窺がつて居られましたる花の方慌だしく夫へ馳出で秋季殿を押留め　花「左術門をお手打の儀は暫らくお留まり下さるやうに昨夜氏王丸に傷附けたる者は鳩丸の短刀に依て左術門の仕業といふは御道理の事ながら夫は只疑がひに留まりまするもの未だ確かに夫と定まりませんに付お手打に相成りましては甚はだ妾が迷惑をいたしまそると申すは妾がおさぬ中の氏王丸を伴ひて昨日櫻狩に越むきました其の歸りにて右樣の事出來いたしましたる事ゆえ必らず誰の仕業ぞと申す事が定まりませんでは妾が心苦しうございまする

ゆえ兎に角に左術門を充分にお調へ下され全たく左術門の仕業と申す事が分りましたなれば其の時こそお手打に相成りまするも然るべく又外に如何なる惡人の居りまするやも計り難く能く〳〵御賢慮のほどを願ひまする奥方の諫めに秋季も尤もと思召して其儘元の座に着かれ再たび左術門に打向つて　秋「如何に左術門許し難き場合なれども奥の言葉も尤ともに聞ゆるゆえ暫らく一命を助け置く只今汝は何事か申しかけんとおしたるが是に就ての言譯あらば情を以て聞いて遣はを如何なる事が夫に於て一通り申述べろ左術門少しく頭を上げ右の短刀を前に差置き　左「仰せ御尤ともに存じまする如何にも此の鳩丸の短刀を以て氏王君へ傷附し事あれば某がしを御疑がひに相成るは御尤ともの次第には候へども是に就て其仔細もございまそれば一通り申上げる處を御聞き下されれ

く豫し君にも御存じの如く當年五才に相成りまする倅三之助先頃是ある短刀を拜領仕まつりましたる時に己れの差料といたしたき樣子の見えまをる處より子に甘きは親の常拜領の御品を小兒の差料に仕つるは恐れ多き事ながら彼に與へ他出を仕つる時には晴にも相成りまをるゆゑ是を差させまして參ざいます然るに昨日は聊さが御用の間をもつて妻子を引連れ花園へ櫻狩に參りましたる處丁度北の方にも若君と共に櫻狩の御催ほしのありましたるを見受け奉つりまして君と同じ所に妻子を引連れて遊び狂じまする事は甚だ失禮と存じ花園を立去り滋賀の山間に飼りまして花を眺め時を移し黄昏近く相成り立戻らんといたしましたる處突然彼方の山上より一羽の大鷲飛來りまして餘念なく遊び居りましたる倅三之助を攫掴み雲井遙かに飛去つて其の儘行衛知れぬに相成りました此の

日も鳩丸は彼が腰に差して居りましたるゆゑ鷲に攫はれ身を拾い取つて氏王君に此の短刀を以て傷附け候事と存じまする もがきましたる所から必定腰より拔放れて落ちたるを何人か謂代重恩の御主君へ對し何の怨みあつてか刀を向け奉つる事の是有るべき實は昨夜一旦我家へ立歸り故ためて家來を引連れて滋賀の山中へ分登り倅の仇たる鷲を仕留め尙拜領の短刀を失ひては恐れ多き事ゆゑ是をも尋ね當てんと終夜山中を經廻りましたるが更に鷲の行衛も相分らぬ短刀は勿論倅の死すら目に留まりませんゝ據ろおく今朝家へ立歸りましたる始末にて昨夜御召しに應ぜざりしは右の次第されば勿論氏王君の御傷を被むらせ玉ひし事は少しも心得ぬ是を以て某がしの仕業にあらざる事をか察し下されたくと事の仔細を明さまに申上げましたが固より短慮一徹の秋季殿一度はお手打をお

留まりになつたやうなものゝ充分に左衛門を疑ぐつて居りまするから未だに御怒りは解けざる樣子鼻の先でフンとお笑いになつて　秋「成程怜を驚に取らるゝほどの空氣者あればとや大事を仕出すやうな事はあるまい今其方の申もる所聊さか道理あるやうにも聞ゆれば先づ今日は許し遣はすが明日より日數三日の間に氏王に傷附けたる曲者を搦め捕つて引來るやういたせ左なきに於ては仮令如何やうに申譯をいたすとも其方の罪を定めるに依て左樣心得ろ早々立歸つて一刻も早く其の曲者を捕押へるやうにいたせと仰せられたる儘に席を賦り立つて奥殿を差して立入られましたるがお花の方に於ても諫め兼て同じく跡に續いて奥へ入られました山中左衛門は夢の如き心地にて彼の鳩丸をば詮議の爲めに乞受け我家へ立歸つて參りまして家來の春瀬由良之進を招ぎ　左「扨只今出仕いたした處是々斯々の次第後の浮沈にも係はるべき一大事なれば是非とも三日の間に曲者を尋ね出さなければ相成らん其方に於ても共に詮議いたし呉れるやうにと涙を流して左衛門の語り出づるを聞いて固より忠義の由良之進　由「誠に思ひ掛なき一大事みそ出來に及び何とも申上げやうもございません此上は仰せなくともお家の御恩を被むる我々仮令草を分け瓦を起しても惡人を詮議なし旦那樣の御疑いの晴るゝやう仕まつるの心底にございますると夫よりいたして昼夜を分たず八方に手別をいたし樣々に曲者を詮議なすといへども固より梶之助の仕業といふ事は誰知る者もございませんから他より其の本人の出でべきやうはございません茲に早や二日の日を空しく費やし第三日目も已に夕景に相成りましたが更に手掛りにてもございませんので左衛門は心も心あらず五才の年まで育

で上げたる三之助は黙に取られ妻の柏木は夫が爲めに嘶きの餘りに病ひの床に就き寢ぬる所の曲者は更に手掛りもなく重ね〳〵の禍はいに明日は如何なる憂目を見んかと日の暮行くに從がつて我が一命も消行く如き思いをいたし此の上は如何いたさんと一室に閉籠り腕拱ねいて獨り思案に暮て居りましたがアヽ斯ばかりに心を盡して詮議いたすと雖ども其の曲者の知れざるは我が運命の盡くる所次第に依らば三之助を攫いたる大鷲が空を翔行く其の折に三之助の腰より鞘走して折悪くも通り掛られし氏王殿の輿物の内へ落下り夫が爲めに傷を被むりし事かも計り難し何にいたせ我君より賜はつて我が家にある劒をもつて御主人の若君へ像を負はせたる上は仮令一命に御慈ふくとも其の即の免るべき闕れはふし此の上悪人が出でればとて我が所持の短刀をもつて傷附けたる上は拜領の

品を失おいしピいふ箇條を以つて御咎めを免るゝ事は迚も叶はぬ殊に性來短氣の我君なれば明日に至り如何なる難題を仰せ聞けられるやも計り難し迚も其の即を免かれざる上は主命を待つて一命を捨つるよりは潔きよく覺悟を定め此の鳩丸の短刀をもつて腹かッ捌いて申譯を仕つるみそ武士の本分なりと獨り思案を決しまして己に其の支度に及びました一間を隔つたる彼方の座敷には今年十二の小娘が母の腦みを苦になして涙に呉れて居りまもる様子其の娘の行先も案じ又妻の事を も思ひやり我が亡き後は嘸かしと思へば流石の氣も挫け暫時は歎きに沈んで居りましたが斯くては最期も覺束ふし家にあつては生害の妨げも多ければ寧そ苦提寺へ到り乘て名僧智識の聞にある佛月禪師の引導を受け潔きよく生害を遂げんと彼の鳩丸の短刀をば服紗に包んで懐中をいたし柏木小君を和

めとし由良之進へも餘外ふがらに暇乞をいたし事にかこつけ我家を出で菩提所なる花裝山國字寺といふ寺へ參りました此の花裝山國字寺と申しまするは禪寺でございまして左衛門の家からは彼是一里餘りも隔つて居り花谷といふ所にございます昔しから禪師には隨分名僧が出でまして已に大徳寺の一休東海寺の澤庵和尚なども禪家では有名な人でございまし此の國字寺の住職佛月禪師といふは早や八十に近き老僧でございまして道徳の聞え高く是まで和々の奇特を現はし人皆是を生佛といつて大層尊敬をいたして居ります尤とも此の人は幼少の時一旦佛門に入りまして一度還俗をして武士となつて南朝に仕へ再た出僧に相成つた人でございますから武道も中々に嗜なんで居りまして已に此の講談の發端より申上げたる所の松江判官藤原秋季といふ人も前に申し上げましたる通り南朝に

忠勤を尽したる人でございますが隨分此の南朝には忠義を尽したる人が澤山ございます申上げるまでもなく楠正成の如きは一身を犧牲に供して南朝の爲めに力を尽されましたる人で餘事に渉りまするが此の楠正成の長臣恩地左近滿一などいふ人は最とも英名を後世に殘しましたる人で時延元の元年楠正成殿湊川出陣の刻山城國山崎櫻井の驛に於て怜庄三郎正行幼名を多門丸と申し、年十三才に向ひ、二十年の後必らず足利兄弟確執を生じ尊氏の執權高野武藏守師直逼ばれの氣量者なり又師直の弟越後守師安兄師直に勝る力あれば、左馬頭直義重成兄弟威を爭そいて尊氏再たび時を得るとも後年に乱を生ずる其の折を幸はひ千早に起り天下に楠の武勇を示せよと兎も敎訓なして正成公湊川に進みしが正行は父の敎訓を受け河内國金剛山に至り千早城に立籠りましたが元來大兵の正行殊

に十五未滿とはいひながら父に勝る氣量者でありますから、望年十四才の時に千早城に起つて河内國藤井の戰かひに足利寄手の大軍五万餘騎を破り高野武藏守師直を追討に掛けて散々に足利勢を破る之れ庄三郎正行の初陣是より屢々戰かひに臨みしが楠公の鋒先鋭くして足別兄弟是に敵對太事能はず然るに時移つて後醍醐天皇御運拙く足利の手に生捕に相成り給ひ屢々御艱難を遊され當時は都の内に玉座を構へ刑部太輔景重といふ豪傑が御側はらに附添つて居りますすされば楠公に於ても主上を奪ひ奉まつり、吉野山に皇居を出來はされば充分の合戰成らざるに依つて千早城に於て和田和泉守正任、恩地左近太郎滿一密々相談をあして兎に角都へ紛れ上つて主上を奪ひ奉まつり吉野へ玉座を移し參らせるば一擧にして逆賊足利等氏を滅ぼす事最易かるべしとあつて和田正任に千早城の事

を細み茲で忠臣恩地左近都へ紛れて登るといふので其の身は手飼の小さな野猿恩地に能く馴染んで居りますから是を背負つて都へ登り猿廻しとなつて主上を盗み出し奉まつらんといふ考へが尤とも夫には氣轉の利いた者を連れて行かなければならんと楠家譜代の郎党志貴右衛門の伜右衛門太郎忠親といふ者あり今年年齢十七才父に劣らず武勇もあれば頗ぶる怜悧でありますから是を供にして両人河内國を密かに立ち恩地は頭を井奴にして野猿を背負ひ都へ紛れて上りました扨洛外の木賃宿へ着いて洛中の樣子を見ると流石は花の都中々盛んのもので或一日天氣が素晴しく好いから恩地左近野猿を背負うて刑部太輔景重の屋敷の物見下へ來つて物見の後ろに胡座を敷き樣々の道具を列べて夫からカンカラ太鼓を出して志貴右衛門太郎が打初めました物珍らしき事ゆゑ、都の衆を徘徊の

者はゾロ〳〵集まつて盛る恩地左近見物に向つて　左「扨見物の衆や私は中國筋から段々斯うして都へ上つて廻つて來て猿廻し此の野猿が種々の藝をするから能く見て宜い所があつたら遠慮なく錢を投げなさい錢を投げるのを遠慮されては困るから宜いかいサア是から邯鄲夢の枕義經八艘飛或いは水草苅又は大の字樣々の藝をして見せるといつて頻りに野猿に藝をさせて居りまする物珍らしき事でございますから往來の者段々に集まつて參り珍らしいものだ感心の野猿だ宜い藝をするとバラ〳〵流の上へ錢を投る刑部太輔の門番はお物見下へ黒山のやうに人が居りまするから二人ばかり出で來て見ると此の有樣目先が變つて面白い　○「同役野猿が藝をして珍らしいが大分儲かるやうだ跡で我々が幾らか飯代を遣らへおければおらんと相談をして居る内に日の暮方　左「サア明日は又藝つた藝をやつてやつて終うと見物がチリ〳〵バラ〳〵處へ門番の藝を見せるから又來てお呉れ今日は是で打留めだと打留兩人出て參り　○「コレ〳〵放下師　左「ヘエ　○「ヘエではおいどうもお物見下でそんな事をやつては困る我々の役目に係はるから今日からはならんぞ　左「エヽ藝に恐れ入りましたが茲の所がどうも南向きで日當りが宜くつて滅法人集りのする處藝に相濟みませんが、どうか四五日お貸しなすつて　○「其樣の方は都合が宜からうが我々の役目が立んから困る　左「藝に相濟みません全体此所へ見世を拔げる時に願うべきでございましたがツヒ中國からやつて來る内に暴雨を食つて路銀にも差支へるほどの離儀をいたし旅籠錢の借りも出來る位おどうか一稼ぎ稼ぎたいと必得て是へお邪魔に出ました何とも相濟みませんが又悪と儲かりまそると相當のお禮をい

だしまを是はホンの心ばかりでございますが酒でも召上つて頂だきたう存じます　恩地は紙に包んで何某かの鼻薬を出す　○「これはどうも放下師其の方から我々が斯様な物を貰はうといつて苦情をいふのではない是を貰つて許すとなると何だか武士の權式がおい併し其の方も出したものであるから戻せば慇懃無禮といつて物に角が立つやうなもの同役如何いたしたものであらうか　△「左様折角放下師の志ざしであるからマア是は預かるとして御重役が何か仰しやつたらば我々の方で宜いやうに取扱かう事にしやう放下師又明日も來るが宜い左へエ有難う存じます何分宜しくお願い申します恩地はペロリと舌を出し其の日は立歸り翌日になつて相變らず參り、サア歸日〳〵評判が高いので刑部大輔景重の窓下は黒山のやうな人集り家中の者も門外に出で來るやうになり、刑部太輔是を聞

いてどうも見事の野猿が藝をするといふ是も慰さみであるから見物しやうと愛妾の千牧といふのを連れて物見からツツと來往を見て居る御簾が下りて居りますから外から判然と見へませんけれども恩地の眼は又格別御簾があらうがなからうが刑部景重が後ろから見て居ると早くも見て取りどうぞ此の人に近づき天皇陛下を奪ひ奉まつらんといふ忠臣義膽の滿一野猿を様々に扱かつて相變らず日の暮方に見物を散し両人洛外の宿を差して半丁ばかり來ると後ろから　○「コレ〳〵放下師左「へエ何誰でございますか　左「何でございます　○「其方は毎日窓下へスラリとした美男　左「何でございます　○「其方は毎日窓下へ來つて野猿を廻して居るが拙者は刑部太輔景重の近臣淺野源八郎といふ者　左「左様でございますか毎日どうもお窓下を拝借して相濟みません　源「イヤ〳〵夫は構はんがどうだ貴様酒

は好きか　左「へエ酒は大好で　源「一口飲まして遣はを　左「夫は恐れ入りますな　源「其の若い方は歸してやれと仰ころから金子を出して淺野源八郎　源「コレ〳〵若いの其の方は歸つて宜い　左「へエどうも有難う存じます夫ぢやア親方私ッは先へ歸りまも　左「ウムうんからマア貴樣は先へ歸つて呉れ野猿を頸つ玉に脊負て太皷を擔ぎ志貴右衛門は先洛外の木賃宿を差して歸る淺野源八郎と同道さして左近は唯ある料理店へ上り

源「サア〳〵遠慮あく飲むが宜い　左「へエどうも御馳走樣で有難う存じまも源早速放下師貴樣に聞くが貴樣は大分格服が宜いが力がありさうだな　左「へエどうも且那の前でございますが毎日お飯の四五人前も食はあければ足ません　源「ウム夫はマア結構だ貴樣の生國は何處だ　左「生國は中國でございまも

源「ウームどうだい貴樣は今放下師をして居るが生涯氣樂に暮

したいと思ふあれば其のやうにしてやるし又武士におりたければ其の樣にしてやるがどうだ　左「夫はどうも有難う存じまも併し私しのやうな疎雜の者は迚も武士にはなれますまい

源「ウム武士が忌あれば俺が貴樣に金を三百兩遣はすがどうだ　左「へエー三百兩御馳走になつた上に大枚の金子を頂だいては濟みませんがマアそんな相談に乘らぬ方が宜うございませう　源「何故だ　左「何故つたつて膜一ぱい喰はして三百兩の金を見せて家重代の新身の刀を試してやるぬどゝいふ事が能くございますから　源「馬鹿な事をいへそんな事ぢやアない實は俺に其の刑部大輔景重の愛妾の千枚といふ者と不義をして居るのだ　左「へエー　源「然るに刑部太輔殿を亡き者にして彼の家を横領しやうといふ心得だ　左「成程　源「處が主人は其方知るまいが中々力量を勝れて居て我が手には乘らぬ、ソコで貴樣

は力がありさうぢやに依て組むのだが何でも拵はせ主人に組附いて動かさないやうにして呉れゝばソコで主人を殺して終ひ大願成就をしたら其の方に三百両やる武士になりたければ俺の家來にして遣はす夫とも貴様が否だといへば仕方がない大望を明したからには其の儘には捨置く譯にあらんから氣の毒だが其方を真二ッにして終はなければならないがどうだ

左「成程夫は御免蒙むりませう真二ッにされては叶はないから人殺しの手傳いをして三百両になるといふならかしませうお手傳ひをしませう　源「夫は忝じけない　左「併し旦那私しは斯ういふ身輕い下素下郎でございますから殿様の所へ忍んで行く樣子を知りません　源「夫は宜い此方で合圖をして貴樣を連込んでやる　左「成程夫は有難う存じます何日やるんでせエ　源「主人の油斷を見なければならないから宜い時に俺が貴樣に合圖をするから拵はずに合圖をしたらやつて來て呉よ　左「宜しうございます　源「貴樣約束を間違へては駄かんぞ　左「大丈夫承知いたしました　源「マア遠慮なく飲めと

淺野源八郎充分御馳走をいたして夜の五ッ頃はひに別れて歸る道をから恩地左近は天を拜し地を拜し茲に時とを來つたり我が眞心は此の土に埋もれ天皇陛下を奉ひ奉まつる時節來れり我れまた淺野源八郎に欺むかれたる心算にて危うき場所に臨みあば淫婦奸失を討取り景重殿の命を助け夫を樞會に主上を盗み奉まつらん有難や忝じけなやと勇み立つて恩地は洛外の木賃宿へ立ち歸り其の後相模らも刑部太輔景重殿の屈敬前に出で源八郎の合圖を待つて居りさもそ

第五席

時に二月の下旬に到り歸八郎の合圖があつたるから常よりは早く見世を收ひ志貴右衛門太郎には万事言含めてあるから是は直ちに木賃宿へ立ち源り恩地は酒屋へ道入つて一口飲んで腹造らへをいたし源八郎の沙汰を待つて刑部の屋敷へ忍び込み時刻の來るを待つて居る此方は刑部太輔景重源八郎は氣に入りの近臣又千牧は國より最愛の妾あるに依つて兩人の饗應で奥深き座敷にて酒宴を催はし充分に熟酔をして景重は千牧の膝をお枕に夫へ横たはりし僅大鼾にて寢て終ひました仕濟したりと源八郎取敢したる杯盤を片附けつゝと座を立つて彼の放下師を連れて參り暗がりに待たしておいて　源「宜いか合圖をしたら出て來いよ　左「宜しうございまをと待構へて居る源八郎も充充に其支度をして樣子を見て居る内に千牧は刑部太輔景重が充分に熟酔をして膝を枕に寢て居るを幸はひ急て

用意をしたる懐劍を引抜き只一刺と心得て突かんとなを大恩を蒙り寵愛を受けて居る其の主人を害さうといふ恐るべき心底如何に所うある淫婦を天が免しませうや今景重の咽喉を目掛けて突掛つたる手許が狂つて懐劍の突切で脚さか頬を擦つたるに依りヒヤリといたしたので刑部太輔眼を開き見れば道は如何に目先に光る氷の刃　刑「汝れ淫婦何をいたすと起上りさまに千牧の手頸を取て前に引き淺野源八郎是を見て失敗たりと大刀の鞘を拂つて飛出し物をもいはず切付けたり刑部太輔此の時体を開き千牧の小手を放したるに依り無二無三に源八郎切込んで來る千牧は刑部を狙つて突を掛ける刑部太輔景重聲を張揚げんとそれども大酔して居るが爲め眼も明らかならず聲も立ず閉めき渡る刀をば左右に支へて居りしが兩人は烈しく突掛らん樣に其の所へドウと倒れるしてやつたりと

源八郎眞向より浴せ込まんとなしアヲヤ景重の命は風前の燈火よりも危うき場合でございまを例しもあれ暗闇より躍り出したる一人の男子拳を固めて浅野源八郎の耳の附根を健たかに打ては不意を打たれて源八郎横ッ飛に倒れる欄みに樣より庭へ轉び落る間もおく飛込み來つて千牧の利腕確かと取り拳を回めて目と鼻の間を打たれキャッといふ一聲と共に千牧の両眼は飛出し血嘔を吐いて敢なく息は絶へたり夫より庭へ飛出し源八郎の襟首に足を踏掛けウームと一足押したるに是も怒まち踏殺されたり　左「エ、殿樣お危ない所でございました

刑「部大輔は心神腦乱いたして太やかある息を吐き酔る中は酷め來つて　一刑「千万忝じけない併し其の方は遂に見覚れぬ男であるが予の家來でもあし……オ、思ひ出した四五日前に予の窓下に野猿を廻して居つた放下師であるな　左「ヘエ左樣で放

下師でございます　刑「如何いたして我が屋敷へ忍で參つた

左「左樣でございます實はね殿樣、浅野源八郎といふ奴が是々斯樣の惡手段否だといへば殺すといふから宜しうございますと受合つて今夜お屋敷へ忍び込んだ處が熟ん考がへしに一天万乘の君を安護し奉まつる所の殿樣を殺すへいふのは勿体ないと思つかたらソコで私しが飛出して源八郎といふ奴と世所のお妾とを撲殺して終つたもの實に殿樣お危ない所でございました　刑「成程イヤどうも千万忝じけない藥鍵じて藥とある其の方があらざれば此の刑部景重は姪婦奸夫の爲めに敢なく最期を遂げ天朝への御奉公をいたす事能はざりしが賊に以て忝じけない何をかお具の方に禮をいたしたいと存ずるが……

左「ナニ殿樣私くしは何も禮などを欲しくはございません　刑「ウム左樣か刑部大輔景重は次第〳〵に酔る間めて參り眼もハ

ッキリといたして參りましまして暫らく左近の顔を見て居たが
刑「何も要りません　刑「イヤ其方は何も品は要るまいが併し望
みがあるだらう　左「左樣でございますそれは人間と生れて望
みのないものはございません　刑「ウム其の望みといふは何だ
如何なる事ありとも其方の望みを叶へて遣はす　左「何でござ
いまもと殿樣私しの望みを叶へて下さると仰しやいますか
刑「夫は大きに有難う存じますそうぞ猿廻しの望みだから大し
た事でもございますまいが　刑「さうであらう、併し其の方の望み
は放下師の望みではあいな　左「ヘエ　刑「汝は予が守護する所
の主上を賺奪いたして居るであらうぞうだ……イヤ隱さにはは
及ばん姿形は下郎となり此の都へ入込んで放下師とかつて飽く
まで衆人を欺むけども其の實楠家の忠臣恩地左近太郎滿一と
見た目は僻目か斯く申する刑部景重今晩武士にあるまじき粗

醉をいたして淫婦奸夫の爲めに主上を預かる大切の一命を取
られんとあせしを御身の情けに依り危うきを助けられ何日の
時にや此の厚恩を返もべさ刑部太輔景重万分一の御恩報じ御
身が眞恩地滿一殿なれは必らず主上を盗み出させて御身を初
め楠家一統の忠臣の望みを叶へ申さんが如何に開いて恩地左
近太郎滿一殿に退つて両手を仕へ　左「驚ろき入つたる景重殿
の眼力よな斯ゐるからは何をか包まん眞某がしは楠家の郎黨
恩地左近太郎滿一あり主人正行殿若年なから御父正成殿の存
意を繼き逆敵足利を討つて天下を泰きに治め一天万乘の君の
宸襟を安んじ奉まつらんと種々樣々に艱難をなす又某がし斯
下素下郎に姿を變へて此都へ紛れ込みしも仰せの如く主上を
奪ひ奉まつらん爲め計略なり哀れ楠家の忠臣を思召さば宜き
おにお取計らひ下されたし偏へに願ひ奉まつる刑部太輔景重

膝を打つて　刑「さもさらぬ左もあらん併し我れ過日一目見受けたるに如何にも身分卑しき放下師あらんとは思いしが楠の條は刑部景重必らず登公の望みを達し參らせん」恩地左近も淺野源八郎の頼みを幸はい景重の屋敷へ忍び入つて却つて淫婦奸夫を討つて刑郎太輔の危うきを助け夫を機會に主上を奪い奉まつらんといたしたる處刑部景重に却つて我が大望を知られ一時は驚ろきましたが刑部も又左近の忠義を感じて其の恩に報ゆる爲め主上を盗み出させ楠家の忠臣の望みを叶へるせんといふに左近も大きに喜こび刑部太輔左りの指を折つて日を數へ　刑「二十六日の夜忍びやかに某がし主上を盗み出さん、御身手配をして相待れよと聞て滿一天へも昇る心地おし　左「遠は添じけるし有難しさらば景重殿必らず約を定め申しを失念

はしあるあと忠臣恩地は勇み立つて刑部の屋敷を飛出し洛外の宿へ歸り直樣支度をいたして河内國金剛山千早を差して立歸り正行に是を告げる主人正行の喜ぶび一方なら忠直ちに手配りをいたして刑部太輔が主上を誘ひい參らする時を待て居る然るに刑部太輔景重は密かに後醍醐天皇へ此事を上聞に達し主上叡感淺からず二十六日の夜淫衣を覆い參らせ女の姿として黒塀を碎き刑部太輔お供をして恩顧の侍両三人を連れて我が屋敷を密かに立出る恩地は屋敷の周圍に待つて居りしが默禮をいたし・左「これは楠家の郎黨恩地左近太郎と申さる者イザ御供仕まつらん」と主上を馬に乘せ參らせ警護をいたして洛中を出で已に大和の吉野山の皇居を指して御供に及び都を離れて稍半道ばかり參りまするとと左り手の物蔭より人數五六十人を從がへ御出迎ひいたし正行公に是に控へたり主上叡感

解めなら幸又候半丁ばかり參りまするとものかげより出でまし
るは是和田和泉守正任でございます人數五十人を從がへて是
も御出迎いに參りましたる夫より又半丁ばかり進みまもと恩地
左近の悴恩地太郎恩地兵頭和田和泉守の悴和田新八、其の外楠
家の郎黨或いは三十人又は五十人つゝを從がへまして各々途
中に出迎い見る〳〵間に三百四五十人と相成りました然りと
雖ども暗きは暗し燈火を點ける暇もございませんから主上御
馬上に在せられて　上「此の所は何といふ所なるやとの勅のり
恐れながら稻荷の宿に候と御答へ申上げたる時に主上御馬上
にて

うはたまの暗き闇路に迷ふらん
我れにかさゝん松の燈火

と高らかに詠じ給へば道は如何に忽然として御馬前に當つて
光り物を發し物の黑白も明らかに見へるやうに相成りました
一同是が爲めに難なく道を行き早や朝方に相成りまするとも春
日山の方に其の光り物は飛去りました此の事楠公三代記にも
見へまするソコで楠家の郎黨首尾能く吉野の山の皇居へ御供を
仕まつり此の所に玉座を搆へ茲に正、行が初めて主人の叡慮を
亞いで正三郎左金吾と改名をして後に村上天皇の御宇に左衛
門督とあり位四品を賜はりました此の村上天皇の御宇より南
朝の帝とあり此の時にまだ正行は左金吾で位には就きません
恩地左近太郎滿一は扨群の働らきをなし主上を吉野の皇居に
遷し奉まつりましたが其の後足利尊氏楠家の爲めに主上を奪
はれたるゆゑ是を奪ひ返さんとして、足利の同勢八万餘人大和
國吉野山へ押寄せやうとなしたる其の計畧の裏をかいて楠正
行三千餘人の兵を以て足利の大敵を破り万世に楠家の勇名を

遂ずに至りました是全たく楠氏の智勇に據る所とは申しながら又恩地左近太郎滿一の如き名士の其の與かつて力ある所といつて然るべきであります其の後恩地左近といふ方は三歳を經て敢なくも三十九才にして此の世を去られました是は南朝の忠臣恩地左近太郎滿一が忠義のお話しでございます長々と他談を辨じ甚だ恐れ入りました扨佛月禪師に於ても一度び南朝の爲めに忠節を尽したる人でございますが元々佛門より出でたる人なり殊に先見明らかにして世の成行も疎じめ悟りましたる所より再たび佛道に入て普ねく一切衆生を濟度多くの人の尊敬を受け今は南北南朝穏やかに治まり此の近江の松江の郷も同じ南朝に仕へて功ある所の判官秋本殿の領地とあり城に世間も穏やかゆる佛月禪師は安々と老の身を此の花裝山國字寺に養おつて居ります

山中左衛門は楠家ではあり殊に此の佛月禪師は和歌をよくいたも所から日頃より別けて親しくいたして居るので左衛門國字寺へ參つて住持佛月に對面を求めました所丁度只今本堂に歌多男女の打集ひ頻りに百万遍の念佛を唱へて居りました寺に於て百万遍の念佛とは珍らしい事と思つて居りましたが其の中に和尚が出て參りまして　月是は〳〵　山中氏には能うてそお越しにあられたぞうぞ是れへ通られるやうにと本堂の次の室へ案内を遂げ住持は左衛門が心の中如何に名僧智識あるとて悟るといふ事は固よりあるべきはづはございませんから例もの如く和歌の話に來られたか甚でも國みに參りし事と思ひますから例に變らぬ頃りにナレ〳〵待遇しまする樣子左衛

門は「エー御住持今日は國に藩外の事で貴僧に密々にて折入て願ひ入れたき事がございて參つたと聞て驚師は「オヽ何事かは存せぬが密々にて願みといふ仰せあればアノ騒がしき本堂近き此の座敷にては御話も御迷惑でござらうからと改めて奥まりたる一室へ案内をいたし「扨山中氏本堂に數多の男女集まりて百万遍の念佛を唱ふるとは禪家にあるまじき事と定めしお驚がいもでござらうが實は是々云々の次第と言ひ驚らしく語り出る一節の物語り左衛門は人事ならぬ目前に迫る我が身の大事を禪師に語つて一刻も早く生害を遂んと思ひましたる處先を越されて住持の話し打消す譯にもおりませんから是もいづれ我身に似たる因縁因果の節あるかと聞くともおしに住持の語るを聞ましそると茲に近江國堅田村に後藤角彌といふ鄙士がございまして此の人文武両道に秀でたる者であります

ますが至つて心荒々しく二十五才の時妻を迎へましたが間もなく死別れ其の後は只獨り暮して居りましたが扨一人といふものは萬事に附けて不自由なものので然々嫁を尋ねて居りましたが或る時同じ村に居る喜藏といふ者の世話で武佐の宿といふ處に住居する五郎藏といふ者の娘に當年二十に相成るおきぬといふ鄙子稀なる容貌にて殊に幼少の折から都なる何某の郷のお館に宮仕へに上り起居動作も能くあし至つて心立て優しく近所にての評判の女でございます此の者をも貰い受ける事に相談極まりまして扨黄道吉日を小して婚姻の式を擧げましたが殊の外角彌の心に適ひ未婚仲睦ましく何事もおく暮して居りました此のおきぬの親父の五郎藏といふ者は心立て悪しく常に賭博を好み角彌の有頼なるを見込んで角彌方へ金の無心に參りますが始めの内は角彌も義理ある親の事とて盟

みの餘に金を遣はしましたが度々の無心に角彌も心中面からず思つて居りますおきぬは親とはいへ度々の無心に夫に對しても義理惡しくと親と夫の間に起ち心を痛めて居りました或日の事で相親らも角彌の處へ五郎藏は何處でやつたかへベレケに酔つて參りました今日は鈴殿お内かといふ聲を聞いておきぬは又無心に來たのかと思ひながら奥から出て參りまして

きぬ「オヤお父さんよく入つしやいました「アンマリ能くも來あいのさ、おきぬ鈴殿はお家かきぬ「イエ先程一寸用があるとお出掛けになりましたが最う直き歸るでございませう「さうか度々氣の毒だが二十兩ばかり貸して呉れきぬ「お父さん少しは私しの心も察してお呉んなさい幾ら親子だからといつてさう家の人に頼めやせぬさうかといつて私しは二十兩あんて持ては居ぬ眞正に度々で困るぢやアないか「夫は尤ともだが俺

も今度は少し用があるから來難いが頼みに來たのだが根きり發きりあれきりもモウ是れからは來ないからどうか二十兩でなくとも半分でも宜いから都合して呉れ夫アお父さん困ります

ねへ良人もアいふ分つた人なればこそ今まで惡お顏もせぬ度々來ても貸して上げたんでもが並大抵の人なら今時分は私しは離縁もの何ぼ夫婦の仲でもあまり良人も宜い顏もしないモウ私しはそんお取次は出來ませんナニモウ取次きは出來ねへヒウン出來ねへあら出來のへで宜いモウ頼まねへ昔しから子が親の困る時に貸ぐのは當然だ親の困るのを見て金も貸さぬ知らん顏して居るやうな鈴ぢ頼みにおらねへそんお奴に何日までくつ附いて居たつて仕方がねへサアおきぬ愚圖〳〵せぬに家へ歸つて來てしまへと惡体付くのをおきぬは見兼てきぬ「マアお父さん靜かにおしなさいよ近所へ聞へても氣極ま

が悪いと何か打ち案じて居りましたが親の無理に反敵し難く自分の平生朋へ差して居る珊瑚珠付の簪を抜てきぬ「お父さん夫では良人には内所で是を上げますからどうか是で一時の所間に合して下さいと出したのが一ッの既より遂には已れの身を果をとは露知らず親父に貸し與へました、五郎藏は夫を受取り立ち歸りました其の内に角彌も歸つて參りましたが茲に角彌方へ參りまずる重兵衛といふ浪人者がございまして此者貧困おるをおきぬは氣の毒に存じ折々は物おそを與へなどをいたしまずるから重兵衛も大きに喜こび尚ほ足繁く遊びに參り角彌の留守おそにも來りて話しなどいたして歸る事もございまずいまもから角彌も心の内に怪しみ若しやおきぬと重兵衛と不義密通をいたし已れの留守を幸はい樂しむのでおらうと面白からず居りましたが或日の事で角彌は夕飯を食しながら不圖

おきぬの髪を見ると平生から差して居る簪のおいのを見て「オイおきぬお前平生に差して居る簪をどうした」きぬ「ハイ那れは平生に差そのは惜しうございますから箪笥の抽斗へ納つて置きましたさうかと其の日は其儘に臥もして翌日になるとおきぬは用達しに出て參りました留守に角彌は箪笥の抽斗を開けて見ると簪がない扨は愈々重兵術と不義の交はりをいたして居るか其の証據に彼の簪を送つたのであらう」と自体心が荒々しいから忽ち怒り心頭に徹し心中に何か思案して居りましたが其の内におきぬも用事を濟ませて歸つて參りました「アヽおきぬ今日は幸はい天氣も宜いから遊び旁々竹生島へ參詣に行うと思ふ夫は結構でございます是非お供をいたしませうと其處で辨當おその支度をいたして竹生島へ參りまして此處彼所と景色の宜い處を見物しながら堅田堤といふ處へ參りま

じた時分はモウ日も暮れやうとする時でございますから往來の人もございません此處まで來ると角彌は前後を見廻し突然持て居た一刀抜くよと見へしがバッサリおきぬの肩先から切下げたアッといつて倒れる處を又一太刀俗せるおきぬは苦しき息を吐き　きぬ「何ゆゑあつ妾くしをお手打にあさいます何故とは白痴くさい自分の身に覺へがあらう能くも他者の目を忍び重兵衛と不義密通いたして居つたナ夫を知らぬやうお角彌ではない此の返報には斯うしてやると又一太刀切付けおきぬの苦しむを見て心持快しと散々に嬲り殺しにおし遂に止めを差して刀の血を拭ひ鞘に納め其の儘死体捨より隙落し我が家を差して急き歸らうとそると向かうからチラリ〳〵提灯の燈火が見へる段々近付くと其の處へ參りましたのは角彌の下男の李助といふのでございます下男の李助これを見て　李「ヤ

ア其處へお出でなさるのは旦那樣ではございませんか「オヽ李助か何處へ參る　李「イエ何處へも行きません先程奥樣がお歸りになつて旦那樣が餘りお歸りが遲いから迎ひに行けと仰しやるから參りました「ナニ奥が申付けたとか　李「ヘエお加減が惡いといつて旦那樣より一足お先へお歸りにおりまして今お宅にお在でおいます「さうか」といつたやうなものゝ若しや我を誑らかさんが爲めに狐狸のなも業おらんと怪しみおがら態と知らん振して立ち歸りましたる然るに國より文武兩道の達人大膽の人でございますから今歸つたといふ聲を聞て奥よりおきぬは出で參り　きぬ「お歸りなさいまし餘りお歸りが遲いから李助をお迎ひに上げましたア、それは御苦勞であつたお前加減はどうだへ少しは宜いか「ハイ有難う存じます少々は宜しうございまを旦那樣お揚の加減が宜しうございますもが如何です

か扨は湯殿へ行つて何かいたすのであらうと着物を脱ぎ捨て湯殿へ參りますと背中流しおせする事が別に平生に變つた事はございません其内に晩餐の支度も出來ましたから酒を飲みながらおきぬを對手に種々の話しをして居りましをるとおきぬは角彌の顔をヂッと見詰め　きぬ「貴所今日竹生島へお參りに行た歸りに何か變つた事がありはいたしませんかといふと大抵の者からギョッといたものでございますが角彌は前申した通りの大膽な人でありますから飽まで平氣の顔で　角「アヽ別に變つた事はかつたがと其の儘其の夜は夫れありけりに打ち臥しましたが扨夫よりは常に變りし事もなく暮して居りましたが光陰に關守なく早や其の年も明け翌年のおきぬを殺せし當日と相成ました其の日は朝より雨が降つて居りましたから角彌も書見をいたして居りました其の物におきぬは針仕事

といたして居りましたが何か思ひ出した樣子にて　きぬ「アノ貴所今日の夕方何か思ひ出を事はございませんかといふと　角「イヤ別に何も思ひ出を事もないと知らん振の大膽におきぬは角彌の顔を怨めしげに見詰めて居りましたが別に變つた事もなく又爰に一年の霜星を過し其の年も丁度同月同日即はち妻を殺せし日に相成りました此時に至つておきぬは又角彌に向ひまして　きぬ「今日何か思ひ當る事はございませんか」といふに角彌は　角「イヤ別に變つた事もないと同じ答へに何思ひけんふきぬは忽ち惡鬼羅殺の姿となり角彌の顔をカット睨みぬ　きぬ「角彌殿飾りといへば情けない身に覺へなき罪に殺されし其の忘執を晴さんが爲めに附き纏つて參りしが年月に餘りに心雄々しいゆゑ怨みを返せる事の出來ぬ悔しさと散々に罵しつて一段の陰火となつて其儘姿は掻消を如く相成りました

角彌は大きに驚ろき扨は妻おきぬは重兵衛と不義せしには非ず夫を我が思ひ違より堅田の堤で殺せしが夫を恨みて不思議にも斯く変を顕はし年月附纏つて恨みを晴さんとせしが我が日頃大膽に恐れて其の恨みも晴す事出來ず遂に本性を顕はして消へ失せたかアヽ不便なる事であつたと夫よりは其の忌日には必らず追善供養をなして吊らいましたるが此の日は丁度おきぬの年會に當りましたので土地の善男善女打集まりておきぬを知るも知らぬも皆當人の靈覽を慰さめる爲め此の國字寺を借り受けて追善の念佛供養を行ないたる事の次第を細やかに佛月禪寺が物語りました

第七席

左衛門は佛月禪師の語物を聞いて思はずホッと溜息を吐きア

ヽ世には不思議の事の數々あるものかな其のおきぬなる女子が我が親の不行跡を良人に傳げる事の羞かしく思へばあそ我が所持の品々を親に與へて良人に悪き耳を聞かせざりしが爲めに却つて其の身に疑がいを受け身に覚えもなき濡衣を被むり哀れ良人の刃に罹つて相果てしといふは誠に氣の毒の至り哀れ良人を想ふ所から假に姿を現はして朝夕に其の良人に仕へるといふは實に貞婦の鑑ともいふべきもの夫と是とは離れども我れも主君の御爲を思ひ聊さかたりとも不忠の心はあきものを計らざる事より身に疑がひを受け今や此の所に於て生害を遂げるの己むを得ざるの場合に至りしも皆之過世の因縁からんと暫し歎息をして居りました此の時住持は心附いて　佛「イヤこれは〳〵益もなき長物語をお聞きに入れ嘸かし御迷惑でござつたらう就ては其許が何か密々愚僧に對して

お願みに相成るとの事身に應ずる事あれば日頃の親しみ必ら
ず御叶へ申するの心底あるがゝ其の頼みといふは如何なる
次第か承まはりたいとはいはれて左衛門ハラ〳〵と涙を流し
左「餘りの事に拙々くしく御物語も成兼てッヒ時刻を過せしが實
は其の御依頼の次第とは是々斯々の譯にて何ういたして
も生きて申譯あし難きに就き貴僧の引導を受けて潔きよく生
害をいたす菩提所の事なれば當寺院に於て生害をいたしたく存ず
るとは始終を細やかに語るを聞いて佛月禪師は暫し思をうあだ
れて考かへて居りましたが　佛「承まはれば賊に御氣の毒の次
第其許の御覺悟武士として御道理の事あがら併し何とか御生
害を遂げさせども他に御工夫はござらぬか　左「されば某がしと
ても君に預かる命徒づらに捨るの所存はござらねども今日に

至り絶体絶命奈何とも詮方なくおよばかに命を惜んで事を猶
豫いたせる時は金々殿の御怒りを増しお手討に相成るか然ら
ざるも切腹仰せ附られ其の時に至つて相果るは賊に武士の覺
悟あきに似たれば仰せを待たず潔きよく生害いたす一決心何
卒御留めおく身とき貴僧の御引導に依て潔よく生害の相叶う
やうお取計らいを願いたい佛月禪師も尤もに心得ましたから
然らば己むを得ぬ場合と夫より左衛門を伴おつて本堂へ到り
頻りに今百万遍の念佛を唱へて居りまする男女に向つて　佛「
扨各々暫らく念佛を留られるやう實は是に怒られしは山中左
衛門と申され當國松江の莊松江判官秋季殿の長臣衆て各々の
内には心得の方々も居られる事と存ぜる然るに此の度武士道
の立ち難き事あつて當寺に來られ我が引導を受けて自殺をせ
られんといふ顔ひ愚僧も樣々に御留め申したれども武士とし

て一旦思ひ込んだる事を再たび翻へそといふ事は成難く勿論よく〳〵の場合なればこそ事の茲に及びたる次第御聞入なきも道理と存ぜれば日頃の好親に依て愚僧此の所に於て引導を御渡し申て心安く御往生をおさせ申するの覺悟就ては各々方に固より何の關係も無之き事ながら各々も當寺に打集ひ念佛を唱へ居られるを幸はひ此の人の爲めに其の所に於て百万遍を唱へ菩提のよすがをもおし玉はり度く此の儀を愚僧より御願ひ申すと最と哀れけに禪師のいはれるを聞いて打集いたる男女の者互ひに目と目顔と顔を見合せて何れも興の覺めたる樣子でございましたが併しながら禪師も餘儀なき頼みに斷は兼て各々是を承知いたしましたれども人の切腹をするを見るに忍びぬと思ふものか女子達は勿論男と雖も一人立ち二人立ち段々に暇乞もせずに其の所を逃去りたる者も多くござ

います是も無理からぬ事でございますから禪師は別段に留めもせず夫より殘りたる人々を前に置いて徐かに本堂に於て左衛門に對し引導を渡すと左衛門は有難く是を受けイヤ生害に及ばんと支度をいたしたる折しもあれ庭前の櫻の枝に鶯の來つて一聲を發したるを聞いて左衛門流石は歌道に譽れある人なれば早速に一首打案じ住持より墨短冊を申受けスラ〳〵と認めたる一首の辞世

かゝるとき たかねにきなくうぐいすの
ちかいうれしきのりのひとふし

左「何卒我が生害の後此の二品を妻の許へ送り玉はれたし」と禪師に頼み愈よ腹を切らんといたします百万遍の人々は左衛門の圍回を取囲らし佛月禪師は高座にわむて鉦打鳴し

夫より皆をぶッつりと切落し短冊に取添えて

て念佛を唱え玉ふに連て皆同音に哀れある聲を發して念佛を唱える有樣は實に哀れとも氣の毒ある体にございます左衛門に徐かに肌押脱ひ片袖を引切りて彼の鳩丸を包み南無阿彌陀佛といふ聲諸共に腹へグサと突通せばサッとばかりに迸しる血沙を見ても左衛門が赤き心は知るものを君子も時に迷はざれば世に出でざるの慣ひ斯ばかりの武士を此の所に失かうといふは實に歎かはしき限り百万遍の人々は是を見るより思はも皆目を閉て異口同音に南無阿彌陀佛〳〵と唱えれば是を冥途の知るべとなし鮮血滴たる短刀を取直したる左衛門がグサとばかりに咽喉の笛を搔切つて前へガッバと打倒れ此の山寺の入相に消にて果敢なく相成りました扨又山中左衛門妻柏木は彼の日家へ歸り病びの床に打臥しましてからは碌々は物も食べも三之助の事をのみ歎き悲しんで居りましたが鳩丸の

事に就ては左衛門身に疑がひの掛りましたる事は病いの障りともならんと思ひましたから左衛門を初め一同も全で知らせもに置きましたるゆゑ此の日も良人左衛門は只所用あつて家に居らざる事とのみ心御自殺をいたしたおぼゝは神おらぬ身の夢にも知らぬ何か心を他にまぎらして三之助の事を忘れんと娘の小君に琴に彈かせ侍女に肩を揉せて聊か憂氣を散して居りまもる處へ慌だしく家來の春瀬由良之進が走來りまして

由「扨御新造樣驚に恐れ入りましたる事おがら思ひ掛なき一大事出來に及びました

柏「ナニ由良之進一大事出來いたしたいふは

由「されば此の程三之助樣を失おいてより和女樣には御歎きの餘り病いの床にお就きあされ且那樣も我々共も一同に心痛をいたし成へく外々の事は御耳にお入れ申さゝる心得にて只今までお包み申上げて居りましたが實は是々斯ういい

ふ次第と彼の短刀の事にて疑がい掛りし事を初め今又佛月禪師より使僧を以て左衛門が自殺の事並びに鳩丸の短刀辞世の短冊に添えて髻を送り越されたる事をば由良之進も心には氣遣いあがら何日まで隠し負はせるものではございませんから涙あがらに物語りをいたし包みの内より左衛門の髻並びに自殺の短刀辞世の短冊を取出して柏木の前に差置きました柏木は餘りの事に呆れ果て泣くに涙も出でず叫に聲もあればこそ短冊と髻を見るより眼ばゝ眩み胸迫りワッとばかりに其の所へ倒れ伏し消入るばかりに見にましたから由良之進は慌ろいて側へ近附き漸々に助け越し女子共も共々に背を擦り水を呑ませあどして様々に介抱をいたしましたが最早柏木は人事不知娘の小君も是を見て顔に袖を押當てワッとばかりに泣出し見る目も哀れの有様一同も途方に暮れて居りまする内に

柏木はハッと目を開いて四邊をキョロ〳〵見廻す様子に一同はヤレ有難やお氣が附かれたかと思ふ甲斐もなく突然由良之進を突退けてつッとばかりに立上り柏「オヽ目出度や〳〵花が咲いたか花は吉野の滋賀の里左衛門様か御馬に召してハイ〳〵ドウ〳〵三之助を輿に乗せ、ソレ〳〵アレ〳〵早く〳〵と座敷の回周を駈廻る有様餘りの事に打驚ろいて心も轉倒いたしたるものと見えまも由良之進を初め打集いたる人々は共に打驚ろいて言葉もなく小君は悲しさの餘り母の袖に取縋り小「阿母さまどうぞ氣を確かにお持ち下さいましし情けない事にありましたどうぞ阿母さま心を確かに持つて下さいましと泣叫ぶを柏木は見もやらぬ括枕を抱き丁げ我が頬に押當て子守唄などを唄いまもるは我子を愛せるものゝ如く絲の顔の青柳も必と共に振乱し更に正氣はございません其の内に由良之進

は彼の短冊を手に取上げ涙を拂つて數多度讀上しが心に點頭き泣入る小君に打向ひ

由「お嬢樣お父上の御辭世を御覽遊はせ」

「かゝるときたかねにきなくうぐいすのちかいうれしきのりのひとふし手前は固より歌の心は宜う辨へては居りませぬがどうやらかたきうちといふ五文字を折向に遊ばされ其の假名毎に墨繼に遊ばしたは氏王君へ傷附けし曲者を詮議いたし寃の那に御腹召したる敵討をいたして與れど人に知らさぬ短冊の御遺言御腹召した短刀を禪師樣よりお送りにあつたのも夫と悟つての御計らひと存じまをモウ斯うありましては泣いて居る場合でございません心を雄々しくお持ち遊ばし仮令敵は鬼神なりとも此の由良之進が御助太刀は仕つる旣と御本望をふ遂げさせ申しまをそうぞお國樣其のお覺悟をして下さいまし

と忠義無類の由良之進心に泣いても勇ましき言葉に小君も

感まされ短冊を手に取上げて無念の涙に烟びながらも

小「オヽ由良之進女ながらも山中の総領娘と生れし此の身若しや敵に出遇はゞ眞此の如くと彼の鳩丸を取るより早く傍へにあつたる翠を目掛けて發止とばかりに切附ければ糸は左右にパラリと飛散り群居る鴈の川面へ矢を放つたる有樣であります由良之進は打喜こび

由「オヽ適ばれのお手の内知雷の翠に引替えて仇を復する鉛の翠お勇ましい事でございます手前は是より國字寺へ參り旦那樣のお死骸を埋葬いたす用意をあし御館へも事の仔細を申上げるやういたします只お悼はしきは御新造樣能く〳〵御介抱を遊ばして下さいましと涙を拂つて由良之進立上らんとおしたる折柄案内もなく組子の大勢席を蹴立つてドカ〳〵と入來り

○「ヤア〳〵由良之進能く承まはれ山中左衛門自殺の次第國字寺より申上げしに我君も是を聞し召

じ左衛門自殺をしたるこそ氏王丸へ傷附けたるに極まつたり早々彼が妻子を召捕り其の罪を糺さんと以ての外の御怒り漸々に花の方の御情けにて妻子の命は許されしが家は沒取妻子は固より其方初め召仕いの者共に至るまで領地の境より追放ち當國の徘徊は決して許し玉はざるとの殿命茨と此の家を立去るべし兎や角く拒み立いたすに於ては用捨あく搦め取つて引立るが返答如何にと口々に罵しり騒ぐ面憎さ由良之進は打驚ろきしが恐々しく平伏をいたし組子の人々に打向いまして由御館様の殿しき仰せ爭で違拜を仕つりませうや去りながら見られる通りの家の混雜何卒暫時の間御猶豫を願いたくといふのを肯かぬ組子の如

○「默れ下郎君の殿命ある上からは片時も猶豫は成難し早々此の家を明渡せと虎の威を假る狐とや恐ろしき權柄に由良之進も返せも冒葉もあく搦ころあく柏木

に委細を語つて立退く用意を勸めまするが心乱れた柏木は年來住いし我が家を立去る事の悲しきや妾を何所へ連れて行く仮令鬼が來やうと蛇が來やうとも妾は此處を退くのは忌ぢやと聲を立つて身を震はし中々動く樣子もございません夫を由良之進が漸やくに勸め宥めつゝ小君諸共侍女共に案内をさせ自分は左衛門の遺の品々を懷中いたしまして主人が乘て用意の爲めに藏め置きましたる百両の金をば密かに取出して是を袖に隱し泣く〳〵も一同を引連れて屋敷を立出でまする組子の面々は跡に從がひ領分境まで參りまして遂々一同を追放つて何れも元の道へ立歸りましたソコで召仕の男女共に何處までもお供をいたしたいと申しまするのを由良之進が樣々に說諭して一同に暇を遣はし涙ながらに各々別れを告げて思い〳〵に立去りました跡に主從川人は是より何方へ身を寄せんと沖

に漂よふ捨小舟何れへ便る所もなく只茫然として暫しの間は佇んで居りましたが此の由良之進の弟に箕作といふ者がございいまもるが今は浪人をして何れに居りまするやらトンと夫も分りません外に是といふ身寄もございませんが不圖由良之進心附きまして津の國に聊さかの知已がございまするから、先づ其の方へと志ざし悼はしくも半狂乱と相成つて居る柏木を勢はりあがら年の幼かぬ小君を助けて二里餘り漸々に辿つて參りまもるを茲に地獄坂といふ難所に掛りました途中に泊る處もございません事ゆゑ夜道を冒して是まで參りました時はモウ二更の頃と覺しく遠寺の鐘の音は幽かに響き折々に嘯に月と出でまするが曇勝にて行く道り髪束おく殊に片方は子供の事又一人は氣の狂つて居る女子の事でございまもから中々道も捗どりませんおれども由良之進は一生懸命でございますか

ら更に屈せず兩人を勢はり〳〵誘なつて地獄坂も早や半途は參りましたかと思ふ内に突然傍はらある林の内より現はれ出でたる七八人の山賊共通の眞中に立塞がり中にも先に進んだる一人の賊が由良之進をハッタと睨附け　△「オッと旅人此處は滅多に通されねへ處で丁度地獄坂迷ひ込んだが其方の因果其の懐ころの重たげに見えるはまさか三四文の六道錢とは思はれぬチッキリ細まる山吹色幾らあるか知らねへが殘らず此處へ置いて行けと足弱連と侮どつて忌お文句で威し掛られ弱味を見せてはおらおいと由良之進突然跡に飛退り一刀の柄に手を掛けると思ふ間に汝れ山賊覺悟をしろと拔討に前に進んだ一人の山賊の首を丁と打落せば下り坂にコロ〳〵と轉がる首を柏木が目早く見附けて駈り寄り其の生首を拾ひ取り血の滴たるを皆りみを確かと抱へてニコ〳〵笑ひ　柏「三之助宜

う戻つて來た父上も待詫てお在でおすつた何故目を明かぬ目を明いてと月に透して打眺ろき地上へハタと投捨てアレ恐ろしやと泣叫ぶ身は狂乱の母親を勞はる小君が悲しさ辛さ身の置き所もない位ゐ其内に

×

オー此の野郎味をやるぞと賊共一時に由良之進に打つて掛るを右に拂い左に避け勇を奮つて渡り合つて居りまする内に小君は母の手を取つて元來た道へ立戻り松の木蔭に身を隠し母を逃して聲を出さねやうにいたし暫らく此處に身を忍ばして居りましたる然るに小君が隠れて居りまする處より彼是十間ばかり離れて居りまする所に孤張の小屋があり其の仲に四十ばかりの女乞食蹴月に垂涎を抑上げ二人の樣子を見て居りましたがニッコリ笑ひ何か必に點頭いて小石を取つて後ろの方の古社の羽目へガッチと投ると是が兼ての合圖と見え四五人の女乞食小屋の後ろの小

道から走り出でるをシーッといつて足を留させソッと手招きをいたして側へ呼寄せ何か耳に口を寄せて囁やくと此奴等に於ても互ひに點頭き斯とも知らぬ隠れて居る小君柏木の後ろへソッと忍び寄り言葉もかけず突然に手取り足取り引倒しアレッといふ間もあればこそ兼て用意の猿轡を喰ませ其の儘二人を引擔いで何方ともなく走行きまする此方は又由良之進彼の賊共を漸々に追散しホッと一息吐いて傍へを見れば柏木小君の影も姿も見えませんから大ぬに驚ろき　由「柏木樣よー小君樣よ」と聲を限りに呼はれども我が呼ぶ聲の谷答は更にでございませんと流石の由良之進に於ても悉とく胸を痛め二人が身の上如何成り行く事かと半ば心も狂ひまする位ゐ、只ッ口〳〵とそる内に月も隠れ物の黑白も分りませんから尚尋ねべき便りもなく若しや打洩したる山賊共に勾引されたか又は

賢こき小君殿ゆゑ里ある方へ逃られたか便りに思ふ此方に暫しなりとも別れては嘸やゝ悲しく思召さう賊の跡を追行かんか里ある方へ尋ねんかと思案に暮れて由良之進西へ走り東へ馳せ打迷つて居りまする所へ最前の女乞食小屋の内から立出で

女「モシ〳〵旦那様」　由「オヽ驚ろいた何だ貴様は」　女「ハイ私しは此邊に居りまする女乞食でございますが若しや貴所はお二人連のお女中をお尋ねあもつてお在でなさるのではございませんか」　由「オヽさうだ〳〵今此の坂で山賊に出遇い其の者達を對手に戰かつて居る内に連の二人を見失ない何處へ行つたか其の行術が知れぬゆゑ是から何方へ尋ねて行かふかと思案に暮れて居た處ろが夫では お前は其の二人の女子の在所を知つて居るか　女「ハイ私しが彼所で見て居りましたらば此の辻堂を左の方へと曲つて駈てお出でなさいました大方里の

方へお出でにおつたのでございませうがモウ今頃は四五丁はども行きおすつたと思いますも那の道を眞直に行けば屹と追着くに相違ございませんこの夜更にお女中の身で道聊れない斯んな所へお出でなすつて嘸御心配でございませう早く行つてお上げなさいましと親切らしくいはれて由良之進も獄むかれるとは露知らず　由「能く知らせて呉れた夫で漸やく安心したどうも程無く此の道を又通行をいたすゆゑ其の時禮はいたすぞと言葉を殘して由良之進逸足出して走行きました女乞食は跡見送つてペロリと舌を出し　女「アハヽヽ馬鹿の男もあつたものだ草臥足に那の野郎俺の甘口に乘つて宛もねへ方へ飛んで行きやアがつたと笑ひながら其の身に於ても柏木小君を引擦いて連行つたる小道の方へと行過ぎました處へ又一人の旅人最前申良之進が賊を對手に戰かいましたる時に取落した

る財布の紐へ足を引掛け立留まつて是を拾ひ提灯の明に照して見てヤア是は見覚えのある金財布此の重みぢや百両餘ある様子テッキリ此の道を行つたに違ゐないと財布の紐をグルヽと巻き其の儘懐中をいたして足を早めて里の方へと走行きました抑も此の旅人といふは善人でありませうか又悪人か

第八席

諸国にも乞食を三日それば忘れられないとか申しまして人間も乞食となつては此の上もない零落でございますが併し又其の内にも楽しみのあるものと見えまして勿論乞食の内にも種々あります中には親の敵を尋ねる爲めに身を非人に窶して諸國を廻り歩くとか或は乱世に非人となつて敵地に入るなど

といふものもあり又身の不幸の爲めに心おらせも非人に相成る者もあります中にはそれから千差万別中には善もあれば悪もあるといふやうな譯でございますが併し一概に非人と申せば餘り良い者は少ないやうでございますけれども又稀には身分ある者も恥づるほどの人物も出る事がございまして餘事に渉りますが茲に最とも感ずべき者にて現に其の石碑が浅草の誓願寺の境内に残つて居ります八助といふ非人の履歴に就て面白い事柄がありますから非人に因んで一席お邪魔をいたします

明和の二年酉年十二月大晦日といふ日でございまして、浅草田甫に非人の頭で車善七といふ者がありましたが是は皆さん御承知の通り車丹波守の一子車善七郎と申しまして石田三成の嫡子に相成り三代將軍様が京都御上洛の途中箱根の山中に於きまして三代公を討つて君父の仇を晴さうとした車善七郎其の

者が大久保彦左衛門樣の御吟味に依つて長崎で召捕に相成り、まして江戸表へお差立にありまして三代公の御前吟味に就て大久保彦左衛門樣が松平伊豆守信綱に代つてお調べに相成りました此の車善七郎の傳記は皆さん芝居狂言で御覽にあつて翌御承知でございませう三代の將軍家へ砲發をいたす程の大胆を犯した者か其の後お助けに相成りまして非人の取締りを仰せ附けられましたのは、此の車善七でございまして、此の車善七の弟子でございまして八助といふ者がある是は至つてどうも正直でございまして他の乞食とは違い誠にどうも物覺へも宜しうございます夫ゆゑ善七も氣を注けて使つて居りまして、第一マア非人として何でも宜く出來ます丁度明和二年十二月の大晦日朝早く善七が

善「八助

八「ハイ

善「貴樣御苦勞だが京橋の彌左衛門町から芝の新網金杉其他本材木町へ行て用を足し

て貰はなけりやアあらない用事は是れ〳〵だが行つて來て呉れ

八「ヘエ宜しうございます其の日は恐ろし〳〵寒うございましたが八助は明の善七の云附で用を順に足して其の歸り途に日本橋の室町へ掛つて參りました處が此の室町一丁目にある屋九兵衛といふ煮賣屋がございます此の居酒屋の前まで參りましてアヽ寒いゐ煮賣屋が大層繁てし居る旨さうに飲すで居ると思ふか流石は乞食の身の上だ其の前を餘所に見て通り過ぎやうとすると前の所に黃八丈の財布が落ちて居るオヤッと思つて拾つて見ると中が重へ尋常の非人なれば喜こんで持つて逃げ出もでせうが立留つて是りやア大變だお金のやうだが落した人は嘸困るだらう何の位ゐ遣入つて居るか取りに來た時に其の人のいふのと口違が違つて居る時には渡を譯には往かない何しろ一ッ中を檢めて見やうと思つて其の財布

を開いて見ると小判で三十兩這入つて居りました　八「アヽ是りやあ大變な事だ落しなもつた人は何處の何といふ人か知らないが三十兩といふ金では次第に依れば命にも係るは事何處の人か尋ねて上げたいものだと其の財布の中の金を確かり元の通り收つて此位ゐの金だから今に探しに來るに違いない若し來もつたら渡して上げやうと思つて寒さを耐へて待つて居る處へ一人の番頭体の人が何かキヨロ〳〵しながら來る樣子　八「モシ〳〵貴所は何か落し物でもなすつたのでございませうと見ると乞食だ　○「エヽ私くしは只今落した物があります　八「エ何をお落しになりましたか私くしが拾うた物があります　○「アヽさうですか私くしは越後屋の手からお尋ね申しまも　八「今日番頭の吩咐で芝增上寺の方丈へ行つ代の吉兵衛と申も者　吉「エヽ是はお前さんが何かエ拾つて下つたのでございますか　八「ハイ私くしが是を拾つたのです

ますから所うしては居られませんのでございますが只々お金の事ゆゑ待つて居りました　吉「アーさうですかお前さんは失礼おから何處の者だエ　八「私くしでございますか、私くしは浅草田甫の車善七の弟子で八助と申します非人でございます　吉「へエ則いお方だ大きに有難うございました是は甚はだ失禮ではございますがお前さんに半分上げませうと金を中から十五兩出して　吉「サア是を上げますから乞食の足を洗つて是を資本に何か商賣でもあすつたら宜からう」スルと八助が恐ろしい顔をして　八「何と仰しやいます貴郎は人を馬鹿にして往けおい幾ら私くしが非人だからといつて他人様が落した金を拾つて使をうなんといふ了簡方なら此處に待つて居てお前さんに金を渡さない殘らず私しが其の金を費つて終う夫を待つて居て渡す位ぬだから金は欲しくはございません第一三十兩の

金を半分あんてそんな事はおい話し是は貴所の實ではないかん前さんの御主人の實だ決して私くしは金などは要りませんそんな事を仰しやる法はおい餘まり馬鹿〳〵しい話しだ」と大變に八助が怒つた　吉「是は失禮をいたしましたけれども私くしの心が濟まないに依て夫ぢやアー分お金を上げまもから出の二分のお金をどうか御受納を願ひ度い　八「イヤ是は有難うございます貴所が二分下さるといふから私くしに取つては大金でございますけれども併し折角の思召しだから頂戴をいたしませう」と押頂いて禮を述べて其の儘八助は其の處を立ち去りました後ろ影を見送つた手代の吉兵衛がアヽ大した乞食乞食でも何か由緒ある人に違ひないと思ひ、ソコで吉兵衛は越後屋へ立ち歸り番頭の前に參りました其の頃越後屋の支配人を致いたして居りましたのは、忠右衛門又兵衛隱居番頭といふは善

四郎に藤右衛門といふのであります。其の四人の居る處へ參つて　吉「是は方丈から受取りました處のお金でございます」と金を出して恨面を消して貰ひ　吉「扨どうも私くしが疎匆をいたしましたのでお話しをいたし兼ねまするが誠に今日は感心をいたしました人に遇ひました今日私くしが餘り寒いに依つて煮賣屋の九兵衛の處へ這入つて一杯飲りました煮賣屋から出た時に其の金は落しましたが今日は例日もと遣つて大晦日の事ゆゑ迎ゑもモウ探しに行った處があるまいと心得ました事もそると一人の非人が私しに向つてお前さんは何か落し物でもおすつたのではないかと尋ねますから夫から私くしが持つて居るといつて其の財布を呉れました餘りの事に感心いたしましたから半分分けて金を十五両遣はしたる處が恐ろしく其の非人が怒りましてそんな法はない此の金を貰つて使う

丁簡あれば疾くに此の金を持て逃げて終う人の寶を喜こぶやうな人間ではないといつて大層怒りましたから金を二分やりました處が大變に禮をいつて喜こんで立ち歸りました是を聞いて藤右衛門　藤「アヽ夫りやア感心だ珍らしい乞食があればあるものだ天晴なる處の乞食ださういふ乞食を引上げて通常の人間にして使つて見たら大した者が出來るだらう此の隱居番頭の藤右衛門といふのは朝早く越後屋の者が迎ひに參りまして、歸る時には箱提灯を照けて送られる此の人は通り二丁目の西側へ煙草店を出して十有餘名の奉公人を使つて居ります善四郎といふ番頭も是は瀬戸物町の西側の方は蠟燭屋を出して居りまして是又七八人も奉公人を使つて居る越後屋返りの隱居番頭になると宏大のものでございます只今の越後屋は風儀がズッと違ひまするが其の頃はひは皆さうでございました

其の際居番頭の藤右衛門、又兵衛の四人は涙を流して　藤「アヽ剛いどうもさういふ者から是非夫は引上げて早たら宜からうが非人を引上げるには足洗ひ金といふのが要るさうだに依つて足洗ひ金を出して引上げてやらうと夫から金子を整のへ股引だの足袋襦袢に胴巻綿入に帯夫等を悉皆其の夜の中に支度をいたしまして夫を持つて明朝早速参つて八助といふ非人を善七から貰つて引上げて來て相當の役を言附けて使つてやらうといふので其の夜は臥つて終ひました翌朝におりまするとも一人で行くのも心許ないから小田原町二丁目の伊賀屋庄右衛門といつて越後屋に出入りをして居る魚屋がございます、越後屋から十人扶持を貰つて居る中々大した魚屋でございますが其の伊賀屋庄右衛門の處へ吉兵衛がやつて參り　吉「エヽお早うございます庄右衛門の家では皆雑煮

を祝つて居りました　庄「何方へ、マアー一ッお屠蘇を召上つて　吉「イヤ庄右衛門少しお前に相談があつて來たが　庄「ヘエ外ちやアあいが私しが昨日ざる屋の前で斯々斯ういふ譯で餘り正直あ非人だから是から車善七の處へ行て是を引上げて來て越後屋で使うといふのだからお前御苦勞だが一緒に行つて呉れませいか　庄「イヤ夫は結構だ私くしはそんな事をするのか大好きだとりやア誠に結構でございまを嘸喜ぶんで勤めるでございませう宜うございます　吉「ぢやア早速俺と一緒に行て呉れあいか　庄「マア〈　既郎一ッお雑煮は如何でございまを　吉「イヤ私しは雑煮は祝つて來たから　庄「さうでございまをか夫は結構でございます正月の元日からさういふ事をなさるといふのもお家の繁昌のお爲めでございます、サア一緒に參りませうと勇みの庄右衛門でございまをから直ぐに支度をいたしま

して吉兵衛の供をして淺草田圃へやつて參りまして車善七の所へ來て　吉「ハイ御免よ御免よ　庄「オヽ御免よ　○「ヘエ入いしやいまし非人とはいひながら大したものでございまを助七といふ者か夫へ出でまして　助「ヘエ是は何方樣からお出でにございます　吉「私しは越後屋の手代吉兵衛といふ者　助「ヘエ御大家樣の御番頭樣で在つしやいますか　吉「當家に八助といふ人が居りませうか　助「ハイ　吉「其の八助といふ者を今度足を洗はして越後屋で召使いたいと思ひますに依てどうか善七さんに此事をいつて取次いで下さいまし　助「ヘエと暫らく下を俯向いて居りましたか其の助七といふ者がポロ〳〵淚を流し　助「誠に有難いお話しでございまをが如何ある不運の男でございまをか其の八助は此の世を去りましてございます　吉「エヽフナニ此の世を去つたどうして　助「夫は外ではございませんが昨日頃の用足に參りまして大層暇を取て遲く立歸りましたスルと用事は首尾能く濟まして參りましたが其の晩の事で或お方樣から二分といふ大金を頂戴したが非人の身で二分の金は生涯身に附く金でない是だけの大金が身に這入つたから皆おに快よう御馳走をしうや是は年忘れの祝いだと申しまして多くの酒肴を盛のへて私くし共にも振舞ひ自分も飽まで酒食をいたしまして私くし共に向つて申しますには私は迚も此の世に立つて人交はりの出來ない身体だから今夜の酒肴を今生の名殘最早此の世に思ひ殘す事はないと申しまして為の歌を詠んで昨晩首を縊つて相果てましてございますと淚ながらに吉兵衛の前へ差出した夫を吉兵衛が取上げて詠んで見まするとと

有難や心に滿る人影の

我身一つに曇りやはせん

百兵術押返して　吉「有難や心に滿る人影の我身一つに曇りやはせんア、情けない事をしたな　助「誠に可愛想な事をいたしてございまも　吉「庄右衛門どうも仕方がおいちやアないか　庄「情けない事になりましたな此の八助といふ者は餘程元は好い者だと見へるね　助「左樣でございまも元は或お大名樣のお家に仕へましたる者で浪人をいたしましてソコで商業をいたすのにも腕に覺へはおし仕方がなくつて遂々非人にまでおりゝ下りました者でございまも是までの間親方の申す事は何一ッ言葉返しをした事はおく人と喧嘩口論をいたした事はおく此の小屋に多くの手下が居りまするが八助位ゐの人間はございません今日お出で下し置かれまして那の八助が生存らへて居りましたおら御大家樣のお引立を蒙むつて立派に人交は

りが出來ましたものを此の世を見切つて相果てましたのは誠に情ない譯でございます　吉「アゝ誠に氣の毒な事をしたナ、夫ちやア其の死骸をどうか此方へ申し受けたい　助「左樣おらもうか宜しく願ひ度う存じまも夫から車善七に話しをもると善七も大層喜こんで　善「アゝ有難い事だ趣後屋樣からさうしてお出で下されたは折角の事だから夫ちやアお願ひ申す事にしやう」とソコで善七が夫へ立出でました吉兵術に厚く禮を陳べ手代の吉兵術は　吉「八助の死骸を片付けるに就てはどうか當家のお乞食の手を貸して下さいましと善七に申し入れると善七が　善「へエ宜しうございまも　吉「何しろ是は直ぐに當家へ搬ぎ込む譯にも往かないから、此處で始末をしたいから　善「夫ちやアさうしませうと夫から庄右衛門が輿屋へ行て輿を買て來るおそして非人で家の悪皆京帷子から何まで一通り整のへ

まして是を擔がして持つて行くスルと伊賀屋庄右衛門が出
私くしの寺が淺草誓願寺だから誓願寺へ行つて頼みませう
吉「夫ぢやアどうか誓願寺へお頼み申す事にしやう」と吉兵衛と
庄右衛門が施主といふ事にありまして善七の所へは金を三兩
遣り　吉「誠に是は少ないが皆あの者に跡の事を淨めるやうに
善「恐れ入りましてございます一同の小屋者も厚く禮を陳べツ
コで庄右衛門が誓願寺へ參つて誓願寺の和尚に委細の話しを
して　庄「どうか御當寺へ吊らつて貰いたいといふと和尚も其
の廉直を感心いたされ唐土の伯夷叔齊にも劣らん賢人なりア
ハ剛い非人であるといふので快よく承諾をいたしましたから
ソコで越後屋の手代吉兵衛が八助の死骸を此の誓願寺へ立派
に葬式をいたしました和尚も憐ごろにお經を上げ引導を渡し
て誠譽淨念信士といふ法名を附けて葬れましたソコで吉兵衛

が金子十兩を掛けまして立派な碑を拵らへて「誠譽淨念信士俗
名非人八助」として其の側へ有縁や心に滿る人影の我身一ッに
曇りやはせんといふ歌を彫附けてやつた、魚居の庄右衛門が我
が先祖同然に年期々々を吊らつて供養をいたしてやりました
人は正直正路あれば斯樣ある幸福のありまする事で此の八助
は實にどうも非人とは云いながら天晴ある者でございまして
鳴巣先生が駿河台雜話の内に書れた位の人物でございます
人は一代名は末代でございまして非人とありましても斯く志
ざしの正直なるが爲め淺草誓願寺の境内に人に目立つはやの
立派ある碑を殘されましやるは誠に名譽ある お話しでございる
ます

非人の中にも此ふいふ見上げた者もあります事が然るに又柏木小君の二人を手下の者に勾引さした女非人此の者は名前を鬼芝といつて地獄坂の谷陰に住居を設けまして多くの女非人を集めて其の頭と相成り世の内は手下の女共に比企尼順禮等女おどに扮装たせて諸方へ差出し大約食料又は屋根代などいつて一人前幾らといふ事を定めて置きまして稼いで参りまする銭高が一文でも不足をそれば打つたり叩いたり散々に責折檻をいたしまする事宛然亦鬼青鬼が餓鬼を責むるが如くでございますから本来芝といふが眞の名でございまするが鬼のやうだといふ處から鬼芝〳〵と人が呼ぶやうに相成りましたる地獄坂の谷陰を住居にして居る處からして鬼には緑のある奴でございまを扨此の鬼芝が最前由良之進を偽はつて里の方へ走らしてやりましたる跡で彼の假小屋へは戻らず細道

傳ひに谷陰の住居へ歸つて参りまして出窓の根深と綽名のある五十ばかりの女乞食を呼寄せ　芝「先刻お前達に言附けてやつた彼の二人の女はどうした　根「ハイ那の空屋の内へ括し附けて置きました　芝「オヽさうかと火鉢の前へドッカリと女の癖に大安座をかいて徳利の酒を燗をしながら今各々が稼いて来た銭勘定をスッカリとして　芝「オヽ誰も彼も今日は皆お能く稼いで来たマア俺も毎日〳〵彼の坂中の小屋つ出て往來の人に銭を貰ひあがら懐中や行季に目を注けて山賊共の探索となるのも其の仕事の割前が欲しいばッかり何にあつても楽に世の中は渡れねへサア〳〵皆あも今夜は休み明日又精を出して稼がおけりやア往かねへせ」ハイ〳〵と女乞食は圓燈の周圍に寄集まり木の枝おどを折くべまして欠けた茶釜の湯を沸し是を呑みながら各自に何か話しをして居るもあれば隅の方で

欠茶碗に冷飯を盛つて食つて居る者もあり梅毒の膿汁を拭つて膏藥を貼更えて居る者もあれば或は潰して居る奴もある實に汚らはしき乞食の住居其内に彼の出刀の根深といふ婆アが柏木小君の二人を鬼芝の前へ引いて參りました小君は此の有樣を見て悲しくもあり怖くもありどうなる事かと胸疝ろき、下俯向いて居りまする側には母の柏木はモウ氣が違つて居りまするから斯ういふ所へ出ましても全で夢中と見えましてウトリ〳〵と居眠をして居る樣子鬼芝は欠茶碗に德利の酒を注いてガブリ〳〵飲みながら芝「オイ姐や夫りやア御前の阿母アか能く面が似て居るが此んな處へ來て居眠をして居る所を見りやア大方氣でも狂つて居るのだらう何所のもんだかは知らねへが斯うやつて俺達の側へ連られて來た上は井戸へ陷つた蛙も同樣逃げる事も何うもる事も出來ねへからモウ何處へも行

かふと思はずから此の乞食の仲間入をして表へ出て往來の人に錢を貰ひ雜用の錢さへ俺に拂やア宜いのだから、何日までも此處に足を留て居るが宜い若し又夫がどさいふなら地獄坂の鬼芝が餓鬼貧に責附けて酷い目に遇はせるがどうだ」と言を飲みながら憎々しい鬼芝の言葉小君は怖さ恐ろしさに小ハイ貧女の仰しやる通り是は私しの阿母さまでございますか少々仔細がございまして氣が取逆上てお父樣は非業の最期をお遂げなされ其の上家は沒取にあり便る所もございませんので家來の由良之進といふ者が少しの知邊があるからとて是から都へ參る心算で漸々是まで參りました處山賊共に出遇いまして由良之進が夫と斬合つて居りますゆゑ私しと阿母さまは木の蔭に這入つて隱れて居りますと内に此處にお在でのお方々に連られて是へ參りましたどうぞお慈非でございますからお

許しおすつて下さいましと涙を流して頼み入るのを鬼芝はセヽラ笑つて　芝「お慈非のお情けのといふお前明日ッから表へ出て往來の人の袖に縋つて言ふ言葉だ地獄坂の鬼芝と人にいはれる此の俺に何でお慈悲の情のといふ事があるものかそんな世迷言をいふにやア及ばねへ、ハイといつて俺達の仲間入をすりやア良し忌だといやア今いふ通り餓鬼貧にもるからさうも思いねへ」と嘯し掛られ小君に於ては只ワナ〳〵と慄えて居ります側に居る柏木は此の恐ろしい鬼芝の言葉も耳に這入らぬものか　柏「オヽ驚が來た〳〵　アレ那んおに怖い目をして驚がお前を攫ひに來るから早く小君逃げなくては往けないと娘の手を取り馳出さうとする處を出齒の根深か立塞がつて柏木を夫へ突倒し　根「エヽ喧しいや狂氣女此んお者を仲間に入れても邪魔にある事その事一思ひにと已に咽喉に両手を掛て柏木

を絞殺さんといたしまするから、小君は驚て、根深婆アの手に取縋り　小「どうぞ許して下さいまし其のやうな手荒な事をして阿母さまに若しもの事があつては大事と子供ながらも母を拒みまするのを根深婆アはエイと突退け己に柏木を絞殺さんといたしましたる時に頭の鬼芝　芝「サア〳〵　根深少し待ちねへさう氣短かの事をしちやア往けねへそんな狂人に口を利かせりやア喧しくつてあらねへから猿轡を食めて其の柱へ括し附げて置きねへと頭の指圖に根深を初め二三人の女乞食柏木の手を取つて後ろへ廻りグル〳〵巻に縛り上げ荒木柱へヴカリと括し附けて終いました娘の小君は堪り兼ねワッとばかりに泣叫び母の側へ近寄らうといたしまするのを突退けられ轉がりながらも又起上つて來る處を蹴飛されて餘りの口惜さに長き袂を顔に押當て烟返つて泣伏しました鬼芝は根深と顔を

見合せて　芝「何とマア年にも似合はねへ強情の阿魔ぢやアねへか嗚娘や先刻も俺がいふ通り此處へ連られて來たからにやア否でも應でも思ふ通りにして追使ひにやア居ねへのだ強情を張らねへで温順しく乞食の仲間へ加はつて此處に稼いでさへ居りやア阿母アの命も助かり今縄も解いてやるサア〳〵泣いて居ねへで何とか返事をしねへかと酒を注いではガブリ〳〵飲んで居る其の面色の怖ろしき話に聞いた鬼婆アとは此ういふものかと顔も得上げぜ泣いて居ります側から出齒の根深婆アが　根「ねエお廻見りやア容貌も美くしく年もまだ十二三袖乞をさせるなア惜しい代物だ寧そ賣飛ばして金にした方が宜いぢやアありませんか　芝「夫りやアお前がいふまでもねへ那の狂人を人質にして此の小女を外へ出し袖乞をさして居りやア人買の目に留り先から好んで買いに來りア百兩の代物なら

二十兩や三十兩の足が附いて宜い直に賣れるあア知れた事、ヨッと此女の親族の奴が此の二人を取戻しにでも來やアがらア此方等の足沈錢を充分と取られねへぢやア手放されねへ何方にしても宜い錢儲け方んお島ア近頃餘まり掛られへ今日は餘程宜い日だと見える　根「眞正にさうでございまもねエ」と二人の話しを泣きながら聞いて居た小君漸々に顔を上げて　小「モシお二人さん迚も斯うなりましては仕方がございませんん仰しやる通り貴所方の仲間に道入りやんな事でもいたしますから阿母さまの那の縄目をどうぞ解いて下さいましと涙ながらにいふのを聞いて鬼芝はニッコリ笑ひ　芝「オヽ能くいふ事を肯いて呉れたぞんお者でも初めの時にやア忌がつて泣いたり騒いだりするけれども三日乞食をもりやア三年の間其の樂しみが忘れられねへといふ位ゐマア乞食の飯も食て見るか宜い夫で

目つて聞かせるが、此方等の仲間で仝じ錢を貰うにも種々の仕方がある藝をして錢を貰う分にやア二百や三百の稼ぎをするあア苦にもおらねへが何にも藝無しで人の袖に縋つて貰うあア餘程骨が折れる見りやアお前達も滿更惡く暮した者でもねへ樣子大方藝も仕込んだらうが皺を折つか鍋を舞うか夫とも琴か三味線か何でも出來る物をいつて見なといふ尾に附いて出齒の根深毛虫のおかつも夫へ出て　かつ「サア姐や今お皿のいふ通り何か藝が出來さうだが何でも出來るものをいふが宜い　根「サア〳〵さう泣いてばかり居ちやア分らねへ、エヽヂレつてエ事だなと情けを知らぬ惡婆達股の邊りを捻られて　小「ハイ申しまもからがうぞ許して下さいまし別に藝といふほどの事も出來ませんが少々〳〵ばかり阿母樣に教えて頂だいた築紫琴と儲禮の折かた花むしろ位ゐの事は下手ながらも覺えて居りまもを」といひおがらも又涙に暮れる鬼芝は打笑つて　芝「アハヽヽ儲禮や花むしろが錢貰ひに何の役に立つものかまだ〳〵琴を覺えるのが其方の幸はいソレ先月梅毒で死んだ小草の阿魔が遺物に取つて置いた破れ琴爪も丁度餓鬼に合うだらうから取出して戰かせて見ねへ其の藝の善惡で幾らか價値も違うからと指圖に根深がハイ〳〵と返事と共に立上り破れ襖を押開けて取出したる古琴に粗末の物だが爪を取添へ小君の前へ差出しました國爐の周圍に座つて居る女乞食は結句面白い事に思ひまして　○「サア〳〵姐や早く何てもやつて聞かして與んなお巧くやるとお如に賞められるから、沿かに確かりやるが宜い」とアイ〳〵　周圍で囃されて尙更小君は悲しくおり暫し其儘差俯向いて居りましたが　かつ「サア〳〵何を愚圖〳〵して居るんだ、やらおけりやア又捻るぞと毛虫のおかつに嚇されて

漸々に涙を押拭い慄える手にて引寄せる片足もげたるちんは琴端の欠けた爪を嵌め掻鳴す琴は愛いの内に流石腕に覺えし業聲も幽かに數からぬ身には只思ひもなくてあれかしと」唄いかくれは柏木は身をもがき猿轡をは取解き　柏「ア、苦しや堪鞭や腕が切れる此處解いて」と身をもかきまする爲めに荒縄に腕首を摺破られ流るゝ血汐に袋う子を染ふを有樣を見るより小君は烟返り　小「モシお頭にお願ひ申しますお願みに任せて琴を調べまする上はどうぞ母樣の縄を許して下さいまし」といふのも肯かず鬼芝は首を振り　鬼「イヤ〳〵　あらぬへ氣の狂つて居る奴を減多に縄は許されぬへ泣ッ面しぬへでサッサト琴と彈け夫とも愚〳〵しやアがるとモッと阿母アに痛エ思いをさせるぞと睨み付けられ詮方なく小君は再たび琴撥鳴して哀れなる聲にて琴唄をうたいまする柏木は涙を震ひ身をもが

いて泣叫びまする樣子に今は小君も堪り兼ね指も慄えて糸に爪が乘りません位ゐ　芝「エ、モウ宜いから止せ〳〵そんなこつちやア軒に立つて物を貰うにやア役に立たねへ明日ッから石山寺の境内で莚の上に面を曝し琴を彈いて錢を貰い阿母アとお前の二人前の雜用に四百の錢を欣かして來ると酷い目に遇はせるからさう思へおかつ其の狂人の縄を解いて藪陰の空屋へ投り込んで戸を確かりぴめて置け小女ばモウ琴は宜いから此處へ來て些と腰でも即くが宜いといはれて小君は又ビックリ胸を冷やして立兼て居りまするのを　芝「サア〳〵來ねへかと叱り附けられオド〳〵しながら鬼芝の側へ寄るとプーンといふ腋臭の臭いデ〳〵肥つた尻にも似合ぬ鹿子の細帶をグル〳〵と巻きゴロリと横にあつて小君に腰を揉ませながらグウ〳〵高鼾をかいて寢て終いました　○「サア御頭がお寢み

あすつた風邪でも胃くと往けねへから」と上から破れた布團を掛け出で歯の根深が逃げぬやうにと小君を自分が預かつて其夜は一同思い〳〵にゴロリ〳〵横たはり眠りに就いて終いました

第十席

茲に近江國石山寺と申すは最とも由緒ある寺でございまして石山寺の秋の月とて近江八景の内にも加えられ其の名勝日本全國にても一二に擧られるはどの絶景の地でございます其の由來を尋ねまするに天平勝寶の六年の創立にして本尊二臂如意輪觀世音は聖徳太子の御作にて其の丈僅かに六寸夫を良辨僧正如意輪を作つて太子の作り玉ふ所の尊像を服内にをさめ奉つり之を以て本尊とおし凡そ一千有餘年の靈場でございま

して從つて其の利益も著しるしき事でございますから遠近より參詣の善男善女日毎に群をなし暫しも人足の絶える事はない位ねでございます時は弼生の末なれば山内に植附けし樣々の花は散るもあれば開くもあるといふ人の心も浮いて居る時節でございまそから殊更に賑はしく雜踏を極める中に今咲出さんとする藤棚の下に一枚の莚を敷き琴と申しましても片足もげて居りまして小さな箱をかい物にいたし頻りに琴歌を唄ひながら搔鳴して居りまそる小娘髪は都風に結びまして色元結を掛け花簪を差しまして紅葉を染出したる振袖に鹿子綸子の紫の色もモウ褪らいで居りまする帶を締めて居る其の樣子は一見して根からの乞食とは思はれません垢染みては居りまするが何とおく愛ひを含む目元の愛嬌若し是を充分に粧はしたならば如何に美くしく見えるかと思はれる位ね此の女子で

ぞ前申上げましたる山中左衛門の娘小君でございます世にある時には山中のお嬢様といはれ荒き風にも當てられぬ身が一朝家の禍はいより其の身は乞食の群に入りまして哀れにも日々此の石山寺の山内に來りまして此の藤棚の下に琴を播鳴し往來の人に一文二文の合力を受けて其の錢を掻集め頭の鬼芝の處へ持つて參り母と二人の雜用に當てまをる實に哀れの境界でございまを其の身の素性は知らずとも何れ由緒ある者の娘が不幸にも斯る有様になつて居る事と誰しも思いまする處より皆其の藤棚の下へ集まり往來の男女爭うつて錢を投與へまする其の度毎に小君は頭を下げて

小「お有難うございます

と禮をいふ其の樣子は一入不便に見受けられまをされば小君は日毎に多くの錢を貰ひまして親子二人の雜用を欠かして持つて參るやうな事はございません何某か餘れる錢にて内々母

の口に合うやうな物を買つて參つて是を食べさせ其の外に何餘りまをる錢は悉とく鬼芝の前へ出して終いまするから固より貪慾の鬼婆アニコ〳〵顔で其の後は拳を當てるやうな事はございませんゆえ小君も思つたよりは心安く日毎に大道に顔を曝し物貰いをするは其の身ばかりではない親までの恥と思へば身を切られるやうに悲しくございますが固より一錢の貯へもなく立寄るべき蔭もない身の上でございまするから仮令此の所を極を連て立退いた所が矢張乞食をするより外に仕方もございませんやうせ乞食をして居るなれば此の賑はう所に出て居る其の内には由良之進が尋ねて來る事もあらうと夫を思へば便りに其日を送つて居りました然るに程遠からぬ處でございまをるから松江家の家來あるにて此の石山寺へ參詣に參る君あるやチロイ〳〵小君の姿を見る事がございまして那れは

山中左衛門の娘だといふ事を知りながらも一旦罪を犯した者の妻子なれば斯成行くも自業自得と既の事を知らぬ者が誰一人救ひ呉れる者もなく皆餘外に見て行過ぎするは實に情けない事でございます其内に月日に關守なく瓦も過ぎ秋を送り其の年の多の事と相成りましたし何所も同じ年の暮に相成りますれば人の心も何となく忙しく往來の人も何か皆用ありげて馳歩きまをるのが常でございます況して殊更石山詣に參る人も少なうございますから山内は小君が此の地へ參りました頃から見れば全て所の華る如くに淋しく相成り夫が爲めに日々の貧ひも少なふございます據ころなく朝早く起出でまして石山へ參りする前に里へ出でまして此所彼所の軒に立つて袖乞をいたし正午より山へ參りまして相樫らず藤棚の下にて琴を彈いて往來の人の合力を受けて居ります今日も小君は朝早

くより里に出で夫より例の通り石山へ參つて例もの所で寒風に肌を吹かれ手の凍えるを忍んで琴を撥鳴し聲を限りに唄つて居りますが往來の人も稀なり殊に各の日の短かく兎角して居る内に日も暮掛りますするから僅か貰ひましたる錢を掻集まして朝の内袖乞をいたした錢と合せ勘定をして見ると一日の定めだけの錢數は足りません即の所へ是を持つて行つたらどんなに叱られやうかと心配はいたしまするが固より孝心の小君其の身に打擲を受けるは覺悟の上にて阿母さんの所へ何か持つて行ひて上げたいと思ひ門前へ出ると餅を商なう家がございまして其の餅屋の前へ來て小腰を屈め通常の錢は拂ひおがら乞食の悲しさには横柄に買う譯にもありません小「鰹に御氣の毒樣でございますそるがどうぞ其のお加珍を少々貰つて下さいまし」と頼み入れるので餅屋の女房も不便に思ひ女「オ

、可哀想に咽喉寒いだらう那の初や其の子に澤山餅を遣つてお呉れ　初「ハイ〳〵」と小者の初五郎も情けを知る者と見えて餞だけよりは多分に餅を取つて呉れましたから小君は嬉しく小「お有難うございます」とモウ此の頃では乞食の詞も聊れまして幾度となく禮を述べ其の餅を袂へ入れて琴を抱へ地獄坂の乞食の小屋を差して歸つて參りまする内にモウ日も暮れて雪がチラ〳〵降出して參りました の程から催して居りましたゆえ跳足にあつて暗き道を心細くも漸々に小屋まで歸つて參りましして戸の透間からソッと内の樣子を窺いて見ると薪は餞の出おいものでございますもから大風に同燈へドン〳〵くべ多くの女乞食が周圍を取卷きペチャクチャ饒舌りながら焔つて居ります頃の鬼芝は火鉢の傍へ座を占めて酒を飲みながら其の日名々の持つて來た餞勘定をして居りますを小君はソッと少

しばかり戸を開けてコッソリ中へ這入り足を洗つて居る樣子に目を附けた出歯の根深婆アア　根「誰だい其所にガサ〳〵して居るのは……オヽおきみちやアねへかどうして此んなに遲かだつたの頃が先刻ッから待兼てお在でありさアア早く此方へ上つて來ねんか」といふ聲を聞いて鬼芝がギョロッとした目で彼方を見て　芝「何だ小君が歸つて來たのか早く此處へ來い〳〵」と呼附けられてオド〳〵しながら小君は頭の前へ參りまして懷ころから少々の鳥目を取出して　小「アノお姐さん今日はお天氣の惡い故か往來の人もございませんで漸々是だけ貰つて參りましたから今日は是だけ取つて置いて下さいましといいて參りました足では不足でございますが足りないだけは明日稼つて前へ差出した錢を鬼芝は手早く勘定をしたが大きな目を剝出して　芝「コレ小君此の頃は手前も段々稼業に馴れて來て

明日は里へ出て門並銭を貰つて歩き正午から山へ行つて稼いで居りやア四百や五百の銭を貰はねへ事はねへ筈だ此處に斯うやつて居る跛足のお仲や瞽女のお定であへ一文だつて欠かして持つて來た事はねへ大方何だらう手前は出て先で買喰いでもしやアがつて餘計お銭を費うんで肝腎の雑用を足りなくして終うんだらう餓鬼のくせにろんお太エ事をしやアがつてどうもるか見ろと突然襟首を掴んで引倒し飲んで終つた慾利で横けに三ッ四ッ打ちましたから慾利は殴られて欠らが飛び額に聊か傷を附けました

小「どうぞお眼さん堪忍して下さいまし明日ッから澤山稼いで參りますから」と逃げやうとする奴を大力の鬼芝放せばみそ髻を手にからんでグイと引立て再たび髻を上げやうとした時に小君が袂から毋に食べさせやうと思つて買つて參りました餅がコロ〳〵と轉がり出たから鬼芝は

益々怒つて

芝「ソレ見ろ此の餓鬼が此んなに餅なぞを買つて來やアがつて大方夜寢て居て食ばふとでもいふ心算だらうモウ勘辨が出來ねへ」とヒー〳〵泣叫ぶ奴を夫へ引倒して置いて烈しく折檻をいたします圍爐の周回に集つて居た女共は側杖を打たれては詰らないと思いまするから誰も夫へ出て詫をしてやる者もなかつたが袂から餅が轉げ出るのを見ると突然夫へ這摺廻つて餅を拾はふとして慾利の欠を拾つて頬張る奴もあれば圍爐へ片足突込む奴もあり大騒ぎをやつて居るのを田舎の根深毛虫のおかつは齒を剝出してゲタ〳〵笑つて居りますばかり宜い年をして子娘の折檻されるのを見て留めやうともいたしません其の内に漸々鬼芝は小君を彼方へ突放して

芝「是で些とは正氣が附いたか子の餓鬼め太エ奴だ今日は是で勘辨してやるが明日ッから一文でも不足に持つて來やアが

ると彼の狂人を干殺して絶うからさう思へさうしたら手前も一人前の稼ぎで樂になつて宜いだらうエヽ面白くもねへ此の餓鬼にからかつて折角酔つた酒が醒めて終つたドレ焙烙でも抱いて寢て終はふ手前達もべチャクチャ饒舌つて居ねへでサッサと寢ろよ」と言放つた儘破れ扉風を引立つて自分の寢所へ這入つた儘ゴロリと横になるが否や高鼾で寢て終ひました

根「サアお頭が寢みやすつた寢やう〳〵」と各自に寢所といつてもホシの名ばかり物置小屋のやうな所へ潜り込んで寢て終ひました跡に殘る小君一人夫に泣伏して居りましたが誰も慰めて呉れる者は一人もない漸々に顔を上げ四邊の樣子を見廻して居たがアヽ情けない事で何ぼ何でも乞食非人に打叩かれ此んなに働きまで附けられるといふは何たる因果の身の上かと子供ながらも無念に堪兼ね暫しの間袖を噛んで身をもがき

聲を忍ばせ泣伏して居りましたが早や其の内に石山寺で打出す二更の鐘窓の障子にサラ〳〵と降かゝる夜の雪は一入寒さを增しまする暫らく變いて居りましたが小君は漸々に思案を定め其の儘ソッと立上り拔足差足して鬼芝の臥床の襖の外に忍び寄り耳を附けて寢息を窺へばグーグーッと高鼾をかいて寢て居りまする樣子音のいたしませんやうにソッと襖を押開けて傘て我が母を入れ置きまする處の空屋の鍵を盜み取り元の道りに鎖を直し道うやうにして潜戸の所へ參りまして都かに一枚の雨戸を引開け漸々に表へ立出でまして元の通りに雨戸を立て盜んだ鍵を口に咬へ裙を引上げ降積る雪を踏分けて彼の獄屋同樣なる空家の所まで馳參りまして何卒いたして今宵の内に母を助け出し何方へなりとも落行かんと子供ながらも一生懸命鍵を合せて錠を押明け戸の間へ手を掛て開けやう

としたが更に開きません敵方の手を戸に掛て力を籠めて押明けれども中々開きさうにもいたしませんで釘でも打つてあるかと思ふやうに指を入れるはどの隙間もございませんから是は如何にと暫し考へて居りましたが年に似合ぬ發明の娘でございますから扨ば今夜の雪にて雨戸が凍り附いたに相違ないと心附きはいたしましたが氷を解かすべき湯や茶が夫にある時もございません元へ引返して鬼共に眠りを覺まされて捕へられてはならあいがさうしたものか折角是まで免れて來て阿母さまを救い出す事が出來ないといふは殘念と心の中の悲しさは千萬無量夫にしても中が大層靜かだが若しや阿母さまの身の上にせんお事でもありはせぬかと夫が心配でございまもから後ろの方へ打廻つて小さな窓がございませゆえ丈伸をして窓の外より雪明りに透して見れば悼はしや母の柏木は

髮もをどろに亂した鐵古狐を一枚處物として小君が力に心苦しつつ上げたる小布團を身に纏ひ弓のやうに身を屈めて座蒲の内に打臥して居りまする有樣は實に無慘といふも愚かある事でございます小君は一目見るよりも胸は迫つて烟返り

小「エーイ阿母さんお悼はしうございます」といはうとしたが心附いて我手に口を押へヒョッとお氣が附いて氣の狂つてゐ在でおさる阿母さまが例ものやうに大きお聲をお立てなされ那の鬼達に聞かれては此の身ばかりか阿母さまをも辛き憂目が過はなければふらん鍵は手許にありあがら開けられぬ戸の雪の闇、悲に物言ふ事さへもならねといふは如何ふる因果ぞ、アー情けない事と何に就けても泣くより外に致し方もございません若しやお腹が空いてお在でおさりはしないかと尙も内の棚子を透して見ると柏木の枕許に欠椀の上に小さお握飯が一

ッ戴つて居るのがございます、オ、結飯のある所を見れば夫はをお腹も空いてはお在でなさるまいが併し那の健身動きもあらおいのは若しや今夜の大雪で凍に死でも遊ばしたのでないかと様々に心迷いどうにかして這入りたくは思へども柔弱い女子の細腕に戸を打破つて這入る事も叶ひませんとつをいつ思案に暮れて居りましたが其の内に孝子の心通じたるものか柏木は眠りを覺まし情けなき聲を揚げて　柏「ア、寒い〳〵」と身慄ひをいたして蒲の上へ起上り　柏「此の寒さに小君は今頃何をして居るか今日は一度も尋ねて來ぬが嘸辛い事であらうと乱心はして居ても流石は恩愛無事の母の様子を見て小君は飛立つばかりに嬉しく思ひ　小「宜う、阿母さま無事で居て下さるいましたか小君でございます阿母さま」と窓の外から呼掛られて柏木も心附き窓の方をシロ〳〵と打眺めて居る様子　小「阿

母さま小君でございます宜う無事で居て下さいましたと」と再び聲を掛られて柏木は突然立上つたがバッタリ又倒れ　柏「オ、、、　小「アレ阿母さまどうかなさいましたか確かりして下さいまし　柏「オ、小君か何故此んな夜更におつて來たのだといひながら窓の下まで漸々に膝行寄つて參りまする其の詞の様子では常の人の如くでございますから小君は益々嬉しく　小「阿母さま聞いて下さいましたが那の鬼芝の詞の様子どうも阿母さまのお命も覺束いましたが那の鬼芝の詞の様子どうも阿母さまのお命も覺束ないと思い今夜の中に此の所を逃去らうと思つて鍵を盗んで漸との思いで是まで參りました處永の爲めに雨戸は閉られどうしても開ける事が出來ません是では迚も今夜の中に逃るといふ事は叶ひますまいが明日の晩は屹と思ひを遂げる心算でございますから阿母さまもどうぞ其の心して待つて居て下さ

るやうと孝心無類の小君の一言乱心者の柏木も身を果敢おしと思ひましてや痛せたる顔に涙を流して打歎嘆き　柏「宜う小君夫はどまでに忘つて呉れるどうぞ一日も早く此處を逃れるようにして呉れまもるやうに」とモウいふ事に少しも異つた處がございませんん扨は正氣になられたかと小君に於ては辛き内にも聊さか喜こびの眉を開き涙を拭つて　小「此處に何時まで佇んで居りました處で阿母さまの御介抱も出來ず暇取つて居りまも内に見附けられては折角思ひ立つた事の妨たげにありまもから今夜一晩どうぞ我慢をあすつて下さるやうに」と明日の夜を約して母に暇を告げ表へ廻つて元の如くに鍵を差し其の傍ばらの目印しのある所の雪を掻分けて盗んだ鍵を其所へ埋め年は往かねど何から何まで氣の附く小君の事ゆゑ雪の足跡を打消しあがら漸々に小屋の入口まで戻り雪に咽喉を潤し

て一息ホッと吐きまして小屋の内を窺がへば誰一人知る者もあい樣子ソッと忍び入りまして素知らぬ顔で自分に於ても其儘臥床に入りました

第十一席

扨其の翌朝は幸はひに雪も晴れ昨日に引替えて好い天氣に相成りましたから小君は去り氣なく例の通り小屋を立出でました鬼芝は出窟の根深を呼んで　芝「どうも那の餓鬼の樣子を見るど何でも武士の娘らしいが此の儘長く留めて置く内に此方の身体に祟りが來るやうな事があつてはならねへから今の内に那の狂人は絞殺して餓鬼の方は何處か遠い國へ賣渡して終はふと思ふから、ふ前宜いやうに計らつて呉んねへ　根「アいお頭宜うございます私しが一ッ買人を極て來ませう」と思い奴に

は悪い友がある物で終始交際つて居るものか、根深は其の餌買人の所へ出て行きましたが程無く立歸つて参て根「エ、お頭那の例の人買の善八を連て石山へ行つて内々小君を見せて翠の手練を聞かせて身の代金七十兩の取極めで明日金を才覚して持つて來ると云ふ事に約束をして參りましたゞうかお頭にもまう思つてお呉んなさい」と手柄顔に歯を剔出して話しをいたしました鬼芝はニッコリ笑つて　芝「相變らず根深宜い働らきをして呉れた」と夫から毛虫のおかつにも其の話しをして二人で一間に於て前祝に酒を飲んで居りますする、小君は又其の日一日例の通りに稼ぎまして黄昏頃に立歸り定め通りの雑用を頭の前へ差出し其の夜は別に折檻もされず夜更けて一同眠りに就きましたが頭を始め人々の寝息を窺がひ誰知る者

もないのを幸はひコッソリ抜出し支度をして表へ立出で前夜隠して置きましたる鍵を取出して空屋の締りを開け　小「阿母さまお約束の通り是から此處を立退きますゆえどうぞ堅を立てないやうにして下さいまし」と母の手を取つて慨だしく表の方へ立出でやうとする折しも衆て前夜の中に鬼芝、根深、おかつの三人約束をして置いたものと見へまして今柏木を殺さうと小屋を立出で柏木を入れ置いたる處の空屋の側まで參りますると二人の人影が見にまする、扨はと思つて月明りに透して見れば道は如何に小君が母を引連れて道れ出でんとする樣子芝「ヤー太エ餓鬼だ、那の狂人の阿母を連れて逃げやうとしやアがる此の餓逃してあるものか」と頭の鬼芝二人の悪婆に下知をもれば根深は心得飛出つて小君の襟髪引掴んで後ろさまに引倒す、鬼芝は足を揚げて柏木を其の處へ蹴倒しまする固より病

鍛れて居りまする柏木、賦られてバタリ打倒れ再たび起上る事も叶ひません、どうぞ助けて下さいといふも口の中聲さへ嗄に立ちません　芝「コレお君、汝ば何日の間に此の鍵を盗み出して來やアがつた、此の情け深ェ鬼芝の目を掠めた其の罰で見附けられたなア百年目嚴濃しの狂人めを俺の引導で殺してやるのもお情けた、サア親の顔も今が見納め能く見て置けよ」と小君の前へ柏木の襟髪取つて引附ける、小君は根深に押へられ身動きも出來ません哀れなる聲を揚げて　小「どうぞお頭さん、ん阿母様までの知つた事ではございいません、此處を逃げやうとしたのは皆んな私しが巧んだ事ゆゑ何母さまの命だけはお助けなつて下さいまし、其の代り此の小君を仮令切らうと突かうともお心任せにして下さいまし、お慈悲でございまもお願さま」と手を合せて伏拜むを鬼芝は目にも掛けず柏木の胸を足下に踏へて

鋭て用意に持つて來た棒の先にて小君の頬をグイと突き　芝「此の美くしい面附に生れたのが其方の因果だ、幾ら死にてエといつたつて汝を殺す譯にやア往かねへ人買の手に賣飛してやる其の代りには何處へ行くにも足手纏いにするだらうから、この狂人は殺してやる、サア念佛の一遍も唱へて往生もるが宜いと柏木を踏引いて棒を振上げ眉間を目掛けてアワヤ一うち打下ろさんとおしたる折しも何方より飛來つたるか一疋の猪垣を飛越え其の處へ躍り來り向ふ所の嫌いもなく空家の壁を突破り鬼芝が棒を振上げたるを見て大ゐに怒り飛掛つて來る處を身を轉して一打打てば猪は益々怒り狂ひ牙を鳴して毛を逆立ち跳り上がると見えたるが突然鬼芝を牙に掛けて一丈餘り刎上げたれば何條以て堪るべき鬼といはれたお芝婆アもドウと大地へ落たる氣息は絶えて終いました、猪は尚も猛り狂ひ逃

行く根深、おかつの二人を追廻し忽ち此の二人をも牙にかけて投殺し夫より小屋の内へ駈入つて此所彼所と暴廻り近附く者を投飛し撃飛しまするから女乞食共は慌て恐いて蛛蜘の子を散らす如くに八方へ逃去りました、猪は母屋を駈出し其の後何方ともなく馳出でましたが此の時小君の目には確かに其の猪の脊の上に摩利支天の尊像顯氣に見にたれば、扨は此の地獄坂の古社に在し給ふ摩利支尊天我々の急難を救はせ給ふに疑いなしと奇異の思いをなし隨喜の涙を流し御社の方に打向つて遙かに伏拜んで居りましたが頓て彼はらに倒れて居りまする、母の柏木を助け起し四邊を見れば鬼芝を初め悪婆二人は脇腹或は鳩尾あたを打破られて血に染んで其の處に死んで居りまするは實に小氣味能き有樣察するに彼等年來此の御社の神前に掛けたる處の鋼口を已等

が悪事の相圖に用ゐ來りしなる無漸の所行をなしたる處より今此の如く神罰を蒙むりたるに相違ございません、小君は初めて夢の覺めたる如く、アヽ是はまさまでに零落ても神の御助けに依り危うき命を助かりたるはまだ武運の盡きざる處と漸々に心もやしくおりまして母を引連れ此の間に落行かんと最前猪の破りたる垣根を越にて行かうといたしまもると茲に一つの溪川がございまして僅かなる川巾でございまもるが昨日の雪解に水量増つて渡る事が出來ません、如何になるんと思いしが忽ちに心附き自分が日々に山内へ持つて參りまする琴を持つて溪川へ架渡し漸々に柏木を助けて其所を立出でました來つて溪川へ架渡し漸々に柏木を助けて其所を立出でました

る心の中は實に虎の口を逃れたる思いでございまする。

茲にお話し別れて山中左衛門の伜三之助は先の日花見の其の折に驚の爲めに搖攫され、其の後行衛知れずに相成つて居りま

したが茲に松江秋季殿の館より東北の方に三里ばかを隔つて伊吹山といふがございまして、其の山の麓に八達山といふがあつて今は此處を谷居十村と稱えまする、八達といふが眞でありますが伊吹山の麓ゆゑに艾に因んで灸村と呼ぶしたるを後に至つて灸といふ文字は火に久しいといふ處から是を忌みて谷居十村と書改めたる由寶暦年間の人にて近江の醫者石川久庵といふ人の筆記の内に相見ねました、至つて小村にして前には伊吹山近く聳へ、後ろ柏原の驛遠く隔たり、如何にも僻地ではございますが、此の村に名を柴六といつて年は四十の坂を越えて年來木樵を世渡りといたして居りまして身代は細ふございますが膽勇の者と見えまして一見剛勇の者と見えまする力は何人力といふ位の筋骨逞ましくして直にして少しも曲れる行ないをいたしません、妻をお峰といつ

て年は三十を五ッ六ッ越えて居りまするが是も心はへ柔しく夫婦の仲も誠に睦ましく良人の柴六は仕事に伊吹山へ登つて薪を取り、おみねは家に在つて差支おきを内職にいたして夫婦共稼ぎに稼いで居りまする、成一日柴六は例の通り伊吹山へ登つて頻りに薪を取つて居りまする内に早や日も西山に傾むいて參りましたから、ドレ里へ戻らうと取集めたる薪を脊負て身支度をいたして居りまするとどこ方ともなく子供の泣聲が幽かに聞えまする、柴六は不審に思ひ杖に頭を上げ耳を澄まして能く〳〵聞くに正しく子供の聲に相違ございません、偖て斯る深山へ子供を連て登り來る人はない、テッキリ山賊共の子供を勾引し來て此の山へ登り來りたに相違あし、イデ其奴を二ッにして呉れんと一旦脊負いたる薪を傍へに打下ろし鉞にかけたる革袋の鞘を外して肩に掛け腰笹を分け岩を登つて聲

を便りに此所彼所と見廻したが更に人影も見えません其内に子供の聲も止みましたるゆゑ是は不思議と佇んで樣子を窺つて居ると頭の上にてキャッといふ泣聲に柴六扨はと思つて見上げると道は開も如何に大木の楠の梢に大ゐなる鷲の巣があります其の巣の上に鷲と見えて五才ばかりの男の子を摑み今にも食い附かんとする有樣柴六は山賊と思いの外是を見て打驚ろきしが同より情け深き者なれば是を見て黙で猶豫いたしませうや木登りをする事は子供の内から嘲れて居りまもる事ゆゑ忽ち笹を腰に差し猿の如くに梢を傳い鷲の後ろへ廻つて參りまもるのを鷲は子供をあいもるに心を奪られて柴六の登り來るを一向に知らぬ樣子でございます、占めたと喜び何も身を屈めて狙い寄り研磨したる大笹を肱長に取伸べて力に任せて發止とばかり打下ろせば鷲の脊中を真二つにふし

除る力に其の儘に梢の枝を斜に斷切つたれば其の儘ドウと倒れる落たる樣子に柴六は打驚ろき子供の命覺束なしと慌だしく木を下つて駈寄つて見れば鷲は片足に枝を握り片足に子供を摑み血に染つて死んで居りまする子供は又襟首をば摑み挫かれて其の儘絶入つて居りまもるから漸やくに鷲の爪を折挫いて子供を抱取り若しや助かる事もあらうかと傍はらに生茂つたる草を取り採絞つたる露をば取つて口に入れまするとヒ頓て息を吹返しワッとばかりに泣出し齒を食しばつて苦しむ樣子、此の年になるまで柴六は夫婦の間に一人も子供を持つた事がございませんから碌々抱きやうも存じませんが、どうぞ助けてやりたいと思ふ一心で其の子供を抱き笹の先に鷲を括し附けて是を擔ぎ取集めたる薪は其儘に捨置きまして麓へ戻つて近所の醫者の許へ參り委細ル話して藥を服ませ殊に其の醫

者のいふには幸はひ鷲の骨は打身に用ゐて大層驗目のある物だといふのを聞いて大きに喜ぶび夫より家へ立歸つて妻のおみねに話しをすると性來慈悲深い女でございますから是も大層喜こび自分が子供を持たぬ者のやうではございません種々に勞はり醫者に敎はつた通り鷲の骨を黑燒にして夫を服ませましたる所不思議にも忽ち驗しのあつたものと見え痛みも去りましたる樣子にて餘り泣きもいたしませんで其の夜はおみねに抱かれて能く眠つて終いましたが翌朝になると頻りに父母を慕つて泣わめきまするので柴六夫婦が父の名を稱ねましても物に驚ろいたるものか人事を忘れて居りまするので其の言ふ事も判然と分りません不便に思つて柴六も其の子供の事で四五日は稼業も休んで居りました、然るに或一日一人の商人が山で

○醫者樣の所で聞いて來たが、お前さんが山で

鷲を取つたといふ事を聞いたが其の羽を矢の羽根に用ゆるのだが賣つて貰いたいと申しますので柴六も此頃山へも行かず錢に差支へて居る所でありますもかち幸はひと思い直段を定めて賣渡しました、處が此の商人はおみねの肌に脊負て居る子供を見て打驚ろいたる体にて

○「オヽ其坊ちやまは松江の莊の判官秋孚樣の家來で山中左衛門といふお方の坊ちやまでお名前を三之助と仰しやる、お前さんは鷲に攫はれた子供を助けたといふのは其のお子でございますか、ア、お悼はしい事で、嘸親御樣は尋ねてお在でございませう早くお屆け申上げたらお喜こびになつて御褒美も澤山下さるに相違ない、私も松江の御家中へは種々商ひに參りますから山中樣へも御懇意でございますから坊ちやまが此うして此處にお在の事を知つた上は此儘歸る譯にも往かない、其のお子を連て行つて左衛門樣へお引渡

しをして御褒美のお金でも頂戴したらお前さんの所へ持つて來て上げやうが何と私に渡して呉れまいかと聞いて柴六は大きに驚ろき　柴夫では此のお子は山中左衛門様の坊ちやまであつたか私は此の前秋季様の御領分で悪い奴に出遇し喧嘩の末に遂々先の二人を殺し自分も己に命を取られる處を山中様の計らいで助けられ、此の谷居十村へ來て今日まで命を繋いで居たのも全くたく左衛門様の御恩、其の恩返しをするには宜い幸は中々御褒美おやゝば思いも寄らぬ事、少しも早くお坊ちやまを迎て行つてお喜こばせ申上げおければそらおいと直様三之助は柴六が背負いまして其の商人に從がつて我家を立出でやうといたしたが早や正午過の事でございますから歸りは夜にならうと思ひ籠身の爲めに例の弁を腰に差し、其の盗商人と共に谷居十村を立出でました。

扨柴六は彼の商人に從がつて一里餘りも歩りまゝ柴六さん私しは少し用があつて那の彼方に見える八幡の社の所まで行つて來あけりやアならないから、お前さんは暫時此の松の側に待つて居てお貰い申したい、直きに戻つて來るからといふので柴六も丁度宜い休み所と思ふゆゑ心得て左りの小道に這入て木の根に腰を掛け休息をして居りまゝ、商人は偖か牛町はかり隔つた彼の社の鳥居内へ這入りましたが此所は小高い山の上で樹木もコンモリとして何となく神さびたる宮地でございまして別段に社を守つて居る人は居る樣子もございません、其の後ろに一本の杉の大木がございまゝ、其の側に筵を敷いて七八人の若侍が破籠を開かせ酒宴をいたして居ります

る其の中にも上座に大安座をかいて居た武士彼の商人の來るのを見ると　侍「オヽ丑平どうであつた首尾は　丑「エヽ御主人様のお察しの通り中々私しへは渡しませんゆゑ其奴に三之助を負はして那の彼方に見えまゝ、そる松の木の側へ暫らく待たして置きました一寸見ました所が只物でございませんから御油斷はありませんぞ　侍「ナニ丑平油斷も何も要るものではない高の知れたる木樵の分際で何程の事を仕出すものか先づ貴様は此所に居ろ那の者は那の儘にして置け、此方別に計畧がある

から」といつて外の若侍共に向つて　侍「扨各々閉居の身分たる某がしが密に御身等を招いて人家離れし此の所へ倉合せしは別事ならず先の日地震坂に於て氏王殿に傷附けたる此の星合梶之助の仕業といふ事は夢にも知る者あく罪を山中左衛門に負はせ腹を切らせ、柏木小君を初めとして家來の由良之進な

でも領分を追拂はせ家を滅亡さしたので衆々の和歌の恨みを晴したといふやうなもの〻驚に取られた三之助不思議に一命を助かり八彦村の木樵の家にある由を聞出したれば、小兒とは云條其の者を生かして置いては我が朝夕の心障りとも思ひ、下僕丑平を斯の如く商人体に扮裝せ云々の計略を以て木樵に三之助を伴ふはせ今彼所の松蔭に待たせ置いたる由我手を下さは易けれども此度北朝の殘將松倉殿へ内通し年來仇とする秋季を襲はせ莫大の恩賞に預からんといふ我が密謀に與したまふ各々あれば、一味の手初めに彼の木樵と三之助を切殺し後の禍いとなるべき芽出しの草を苅取つて賜はりたく存ずるが如何に各々御承知は下さるまいか」と四邊をヅロリと見廻すと惡侍共異口同意に　△「仰せにや及ぶべき斯く尊公へ一致して事をいたす上からは、一心同体何事と雖ども必らず違背する事は

あいと御依頼に依て只今より彼の所へ能り越し兩人を討取る事手間暇の要る事には御座らん、然らば早々出掛でござらう、梶イヤ早速の御承知忝しけあい然らば斯樣〳〵にお計らひ下さい

△「承知いたした」と七八人の惡漢共醉醒しには能い慰をみありとあつて各々山を下つて參りまそる、扨柴六は神ならぬ身の斯る事とは露知らず松の根に腰打掛けて三之助を膝に載せ彼の商人が歸り來たるを待つて居る處へ七八人の若侍小姓の方よりソヤ〳〵と參りましたが柴六が松の根に腰を掛けて居るを見て立留まり

△「汝何奴あれば八幡宮の神木たる此の松に腰を打掛けて居る、不埒至極の奴だ、神木に腰を打掛けるは神主たる我々の頭に腰を掛るも同然此奴遁さな打取れと突然刀を引拔て切て掛る、柴六は事ともせず松を小楯に身を固め

柴「汝れ小賢しき山賊共、八幡の神木は社内の杉といふ事を兼て聞及んで居るに、知らぬと思つて此の松を神木おそれは何の事だ、手前達こそ御辯ならん、サア此の斧に素首を打挫かれて往生しろ」と三之助を左に抱へ腰に差したる斧を取つてブーンと振廻する其の勢ひに滅り兼て居りましたが

△「汝れ下郎猪口才なる事をもる」と前に進んだ兩人遂を狙つて切込まふとなしたるが二人ながら逃つて斧の先に當りしと見え忽ち四ツとなつて其の處へ倒れました、殘る奴輩是を見て四五人均しく力を併せ尖先鋭どく打向へば柴六は是を物ともせず斧の柄を口に喰へ傍はらの石地藏を目よりも高く差上げてヤツと一聲打附けたるに佛に打たれて三人まで地獄落しの鼠の如く目玉が飛出し其儘に相果てました、其の勢ひに續く者のもれば為そ舌を卷いて膽を冷し、遁は叶はじと逃行くを又一人を眞二ツに打割りました、星合梶之助は遂か彼方の八幡の社頭に

登つて此の体を見て柴六の勇に怖れ二の手に出でる心もなく打慄いて居りましたが固より悪才に長けた者でありますから先の日此の神前へ納め置いたる弓矢の額に心附き重藏に鏑矢取つて矢頃を定め柴六が抱いて居る三之助を射落さんと満月の如くに引絞り弦音高く放てしに、三之助の運や強かりけん狙い外れて柴六が脇腹へゲサと射通したり再たび矢を番へしが奉納の弓あれば弦切れて詮術なく尚も様子を臨んで見れば農業に出でたる百姓鍬鎌をかたげて此所彼所より馳出て参りスハ山賊よ強盗よ、矢は何方より射掛けしか」と口々に呼はる其の様子を見て梶之助も見咎められては不都合と偽商人の丑平を従がへ其の儘何方ともなく逃出しました、百姓盟は柴六の周囲に集まり、此の人を見れば衆て大力の聞へ高く、此の邊までも顔を知られて居りまする柴六でございまもから名々打慄ろき

様々に介抱をいたしまするとも斯る急所の痛手でありまもから通常の者なら即座にも倒るべきを大勇無双の柴六の事ゆえ射附けられたる白刃の矢の血に染つたるを打折つて地上へハタり投打ち　柴「此んな飛道具さへあければ仮令幾十人来やうとも暗々く痛手は負はぬものを、エーイ残念な口惜や」と拳を握り切歯をなし怒る眼に無念の涙ハラ〳〵と流す其の有様勇ましく也又氣の毒の次第でございまも、其の内に百姓共追々に打集つて親切に介抱をして柴六を山輿に載せ二人で是を打擔いで三之助をば一人が背負ひ、モウ日が暮れましたから松火を振照して八達村の家へ送り届けました女房のお峰は其の体を見て夢の如くに思ひ　峰「これはまア柴六さん、何といふ姿におんなをつた」と膝に縋つて歎くは道理、此の時柴六は苦しき息をホッと吐いて　柴「其の不審は道理だが實は是々斯う〳〵」と右の次第

を物語り　柴「俺の考がへちやア彼の商人が途中で俺を殺した上三之助様を山中のお屋敷へ連れて行き自分一人で褒美の金に預からうといふ悪巧みに相違ねへ同類の者も五六人打殺したが其の商人は夫ッきり出て來ねへ、肝腎の野郎を打漏したのが残念だ、僅か一筋や二筋の鉛矢位ゐに命を捨る柴六ちやアねへけれども、此の通り脇腹を野深に射られ傷口に夜風が當つて五臓六腑も引繰返るやうな苦しさ迚も助かる事は出來ねへ、此の坊ちやまの命を助けて其の又坊ちやまの爲に命を捨るきいふのも全たく前世の因縁と諦めるより外に仕方がねへ、手前も決して誰を恨むなど死に臨んで思ひを跡に残さゝるは賤しき者に似合はぬ度胸、女房のおみねは餘りの事に何の答もなく暫しのはどは咽返つて居りましたが、三之助は此の程より此の家に日を送り傷も直り夫婦にも能く懐んで參りましたる處右の始

末性來怜悧の小兒でございますから自分の爲めに柴六が此ういふ禍ひに罹つたのかと子供ながらに察しましたるものと見へて　三「爺やアや此の儘死んでお呉れでおい坊の爲めに爺やアの死んだ事がお父様に知れるとお父さんに叱が酷い目に遇うから爺やアや死んでお呉れでおいは」といはれて柴六苦しき内にも嬉しく思ひ膝行寄つて三之助の頭を撫で、柴「オヽ宜ういふて下さつた、栴檀は二葉より香ばしといふなアお前さんのやうな怜悧の子の事をいつたものだらう、頼母しい今の一言此の柴六も根ッからの山樵ではあく元は幡州の國司曾根松様に奉公をして飾磨の六郎といはれた武士の成の果浪々をしてからモウどうせ世の中に出た所が物の役にも立たねへと自分ながらも諦らめて一生山樵で朽果る覚悟であつたが代々傳はる此の力量勝を繼がせる子供もなく私の代で家を斷やが残念、夫の

み心に掛つて居たがお前様が今の一言といひ悪ひ鳥の嘴を逃れた好運末頼母しく思ひますゆえ、韓の李達が虎の血を啜りしといふ例しに慣ひ飾磨代々の力量を今其方に授けるゆゑ此の血を呑んで大力になり世の中の人に知られるやうに立派の武士にあつてお呉んなさいまし」と女房に言附て井を取出させ鎖身の力を腕に入れ刀の尖先で力瘤を突き破り血沙を器に受けさせて夫を三之助に呑ませると三之助も閉分けたものと見え怖いとも思はぬに器を口に押當てグーッとそれを呑干しました、此の時しも星合梶之助を初め悪者共柴六の跡を慕つて此の所へ來り垣根の際より窺がつて居りますると今柴六が腕を突破つたるのを見て時分は宜しと庭へ飛入り三之助を目掛けて只一打に切附けると不思議あるかな三之助心得たりと身を轉し、立上りざま前に進んだ一人をハッタと蹴落し殺いて庭へ飛

下り年貢の爲めに積み置きたる粮の俵を最と輕々と差上げて悪者共に投附ける、其の怪力實に人間とは思はれません、此の樣子を見て女房のお峰が差出したる彼の斧を手早く取つて振廻し眞向梨子割車切忽ちの間に四五人の者を其の處へ切倒を形に似合はぬ力量は彼の頼光に仕へたる金時の幼育も斯やと思ふばかりの有樣でございます、其の勢ひを見た流石の星合梶之助も當り兼ねたるものか再たび其所を退散いたしました柴六は痛手あがらも苦痛を忘れて打喜び

柴「扨ころ我が力量を受繼いて斯く大勢を割手になし一人も殘らず追退けしは遍ばれある働らき是を見れば仮令此の後如何なる奴が來やうとも大丈夫されば俺は潔ぎよく此儘に腹を切つて往生する女房跡を頼むぞ」といひあがら腕を切つた一刀を取直し腹へグサと突通せば、お峰はワッと烟返り三之助も泣出し其の手に組つ

て留んとすれども　柴「迎も遁れぬ此の命留立てされては却つて苦痛を増すゆゑに其所を退いて」と叱られて女房も三之助も仕方なく〳〵跡へ退がる、其の内に柴六は眼を閉て引廻したる尖先に障るは確かに鐵と思ひ摑み出して能く〳〵見れば鐵に銀の象眼にて星合梶之助輝廷所持と彫附けてございます、柴六是を見て大めに怒り　柴「扨は我れを遠矢に掛けたるは梶之助の仕業であるか我れ播州にありし時彼は賤しき漁師の倅、武家奉公を志ざし親を捨て、逐電あし、近年松江殿に仕へて星合梶之助と名乗つて居る由人の噂に聞及んだが彼に恨みを掛ん事此の身に覺えなけれども心賤しき奴なれば金に目を眩れ彼の商人に與したに相違ない、漁師の倅か畢にかゝり命を落す飾斷六郎、よし〳〵　武運に尽果てたかエ、殘念や口惜しや」と鐵を鑽の子に打附けて怒れば一入逝しる血沙は涙然滝の如く又も苦痛

の増しまする様子妻の夕峰は漸々に涙を拭い　峰「女ながらも此のみねが良人の敵の梶之助、爭で安穏に置くべきや、頓て敵の首取つてお墓に備えて進せるゆゑ夫を待つて居て下さい」といふを聞いてニッコリ笑つた柴六　柴「宜ういふて呉れた女房、吃度敵は取つて呉れ」といふが此の世の名殘の一言其の儘ガックリ前へ倒れ息の絶にたる其の有様を見るより又もおみねは涙に烟び南無阿彌陀佛といふ聲も切れ〳〵にて其儘ワッと泣沈む三之助は伸上り柴六の耳に口を寄せ、爺の敵は吃と私しが取つてやる」といふ一言は死んで行く柴六の爲には名僧智識の引導よりも遙かに勝る功德であります

第十三席

扨おみねは泣く〳〵も柴六の野邊送りをいたしまして後密か

に三之助を連れて松江の非に到りまして山中の家を尋ねると道は抑も如何に左衛門は國字寺に於て自殺を遂け、柏木小君等は家を追拂はれ其の行衛を知る者もなく又梶之助は秋季殿を愚將と侮どり松倉家へ内通をいたせし處其の密計一味の者に返忠をする者あつて露顕に及び已に捕へられべき處を早くも悟つて彼の丑平を連て何處ともなく逐電をいたしたと聞いてお峯は胸に張詰めし氣も折れ詮方なくも三之助を伴なつて八彦村へ立歸つて參りましたが、此の度の事に就ては村内をも大分騒がせたるから何とかく人の思はくも疎く相成り力と頼む人もなく、朝夕心細く思ふ儘に此處に居ては良人の敵を尋ねる便りにも悪いと思い聊さかある家財を賣つて是を路銀といたし良人が遺物の銅作りの一刀と最期の恨みの鐵とを持つて住馴れた八彦村を立退き、梶之助と柏木等の行衛を尋ねんと先づ

都へ出で此所彼所と經廻りましたがトンと敵の手掛りもございません、ソコで一、旦お峯が故郷なる三河國宮路山の邊りへ參りまして仮の住家を求め内職おどをいたして三之助をば養子のやうにして育て上げて居りまする内に其の年も暮れ全一年ばかり過ぎまする内に三之助は段々と智恵も出で力も增しまして外の子供から見れば大き〳〵十一二位にも相見にまする、おみねをば其の母の如くに思つて仕へ必らず其の君ふ事に背くといふ事はございません、通常なれば遊び盛りの子供でございますが決して悪戯などはいたしません富士川の驛に出て、旅人の荷物を持ち僅かばかりの賃錢を貰つてお峯の世渡りの助けをいたし固より大力無双の小冠でございますから時に乘せるはずの荷物をも輕々しく持運びまするので賃錢を取る事も八よりは遠く又旅人の方でも同じ事なら弱の子供に錢を取らし

てやりたいと、三之助の來るのを待つて居る位わでございます

お話し別れて春潮由良之進は彼の地獄坂にて柏木、小君等を見失ないまして夫より彼方此方を尋ねましたが更に其の行衛が分りません、若しや山賊等の爲めに勾引され都へでもお出でにありはせぬかと思いましたから夫より都を差して赴むきましたが其の内に路銀も使ひ尽し據ころなく慰さみに覓えたる尺八を吹いて旅龍無僧に身を變し人の門に立つて一錢二錢の合力を乞い夫を路銀として中國を經へ廻り主人の行衛と敵の在所を尋ねあがらに其年も暮れ是より東國を尋ぬんと東海道を下つて尾張國の宮の驛へと參りました日頃より聞及ぶ熱田の宮に參詣おし何卒主人に廻り廻い又敵に出會いたしまそるやうにと心願を籠め夫より殺覺の里へ參りましたる處早や日は西山に傾むき何れかへ宿を求めんと思ふ折から不圖物に躓づきまし

たから取上げて見ると服紗包みの一品扨はと思つて中を開いて見れば百両餘りの金がございまして、由良之進大きに驚ろき何者が取落したか服紗に印してもありはせぬかと古社に腰打掛けて其の服紗をば撿ためると黒染の片袖と財布に入れたる百両の封金でございまを能く〳〵撿ためて見ると此の封金は去年地獄坂にて山賊に出遇い追散したる時に自分が取落したる金でございまして、其の封じ目に山中の印が推してございまするので確かに其の品といふ事が分り尚財布も其の時の品なり又包んだる服紗の端に白い布を縫い附て是に星合氏といふ三字が認ためてございまを、由良之進是を見てどうも合點が參りません包みをば膝に觀せて腕を叉ねき暫らく思案をいたして居りましたが我が落したる時に山賊共が此の金を拾つたかれば賊の身として今まで是を所持して居る間れがない殊に包ん

なる服紗の幅に堀合氏と記したる處を見れば、事に依つたら彼の星合梶之助の家の品なるか、先頃都にあつて彼の噂を聞くに秋季公に對して密謀を巧らみ、其の事露はれて逐電なしたる由事に依らば氏王君に傷附けたるは彼が仕業にはあらざるかと思いし事もあつたるが今此の服紗に包んだる金が再たび我手に戻るは熱田明神の我が志ざしを感應ましく助け給いしに相違ふいと、尚も社の方に向つて遥拜なし思ふに梶之助此の金を拾い再たび是へ落したるに相違なし、固より大金の事なれば必定是へ尋ねて戻り來るべし暫らく此所に足を留め彼の戻り來るを待つて引抽へ呉れんと、百兩の金は懐中に納め、石を代りに財布に入れて元の所へ拾置きして社の内に身を隠し替笛と見せたる一刀を膝に引寄せ今や來ると暫しのはど相待つて居りましたが更に人影も見にはません、今宵は幸はい此の社に一

夜を明さんと思い定めて油斷なく尚も表の様子を見て居りまをる内に彼方のかたより只一人此方へ來る人影が相見えますから扨はと思つて近附く儘に月明りに透し見れば深編笠に面を隠し黒き小袖に米紬の羽織を帶し浪人と見えたる者彼の落しある財布の側まで參りますと編笠の中より此所彼所と窺がい見る其の風体正しく見覺えのある梶之助に疑がいなし、扨こそと心得用意の一腰を後ろに隠し此方も天蓋を頂いて彼の後ろへ寄るとは知らぬ彼の包みをば拾い取り押頂いて懐ろに納め立去らんとおしたるる由良之進、言葉も掛ず鐵を取つてイヤ〳〵と引けばダヤ〳〵と跡へ退り驚ろくかと思いの外少しも慌ろく氣色なく編笠を取つて傍へに打捨て刀の拘に手を掛る由良之進是を見て取つたる鐵を打放ち飛退つて已れに於ても天蓋をかなぐり捨て双方發止と切結び刀と刀の十文字月

の光に刃の閃互いに顔を打見やり　箕「ア御身は兄者人由良之進殿にはあらずや　由「さういふ醜は弟の箕作なるか」道は抑も如何にと両人が深驚の里の夢とばかりに呆れ果て暫し言葉もございません、其餘互いに刀を鞘に納め　由「如何に箕作絶えて過はざる兄弟の所る處に圖らずも落合うといふは誠に奇遇先づ色々と問ふべき事語るべき事もあれども中々一朝一夕の事にあらず、思に角彼方の社へ來れ」と、箕作を社内に誘ふい　由扨我身の事は次に委しく物語るが差當つて聞きたきは星合氏ど記したる服紗に我が落したる百両の包み怪しき片袖を添えたるを其方が所持おもは最と訝かしき事あるが、此の仔細は如何に　箕「イヤ其の儀に即ては種々入組んだる物語がございまする先づ一通りお聞き下されたし、兄上も最て知る如く某かし播州の國主貫根松家の家臣箕取氏の嫡子とあり両親の死後飾

磨六郎が妹深雪を迎へて妻とおし、深雪の姉鶴をも我が方へ引取つて養ふい置きたる所、飾磨六郎故あつて主人より暇を賜はり、某がしも六郎の事に係り合い夫が爲めに浪々の身となり夫より深雪姉妹を引連れて大坂の關の邊りに能り越し三人詫しく暮し居る内鶴は姉と計つて某がしには侍女奉公をすると偽ばり彼の星合梶之助の妾と相成り然るに或夜梶之助の下僕丑平といふ者慨だしく來つて鶴殿折平といふ者と密通いたし、今宵事露はれて主人梶之助殿兩人を手打にいたされ其の不義の証據といふは是なりと鶴が自筆にて折平と申す者に遣はした夫婦の書紙是に依て手打の死骸を引取るべしと申す事ゆゑ據みろおく其の夜梶之助の家に到らんと地獄坂まで差掛つたる折しも宵暗のくらさきれ怪しき曲者に出遇い山賊と思いたれば引捕へんとおしたる時に彼が切込む力が狂び切へにあつ

たる石地藏へ切附けたる其の時散つた火花の光りに曲者の面をチラリと見て尙捕へんとして片袖を引切り殘念ながら曲者は逃がせしが其の儘梶之助方に到つて其の夜初めて彼に對面をなしたるに以前の曲者に能く似たれば是を手打にしたといふも怪しく思いたれども確かなる証據あきに爭そい難く理非の事彼是にて四五日は心忙しく打過ぎ或日巷の噂を聞けば地藏坂にて云々の事ありて、山中殿に疑がいかゝり一家の滅亡覺束なしと聞いて大ゐに打驚ろき引切つたる片袖の袂の内にあつたる服紗に星合氏と記しあるのみならず彼の曲者に出遇いたる時と氏王君の僕を受け玉いたる時と同夜同刻なれば氏王君に傷附けたるは梶之助の仕業なる事は必定夫が故に服紗を証據として山中殿を助けんと其の日直ちに山中殿の家に到つて見れは早や家は空家となつて人影も見へず悼はしや山中

殿は國宇寺に於て自害と聞き御身の跡を慕つて馳行き地獄坂にて此の百兩を拾ひしに其財布に見覺にあるゆゑ扨は都の方へ落玉ひし事と心得彼の地に到つて四五日がほど此所彼所と尋ねたれども更に便づれも聞かされば空しく家へ立歸り此の星霜を過して今月某日鵲の一周忌の佛事を營なみたる其の夜の夢に鵲姿を此の世に現はし梶之助の爲めに計られて不幾の惡名を受け悲命の乃に擂りしか靈魂宇宙に遺遙て極樂往生を遂げ難し尾張國熱田明神に參詣あらば妾の恨みを晴もべき便りを得玉ふといふ告げに仇を討つて修羅道の恨みを晴し遺はさんと今日此の地へ來り熱田明神へ參詣いたした歸るさに此の包みを取落し圖らも兄上に廻り遇いしは飜に不思議ある事」と審びらかに物語をいたしました茲に於て由良之進は主人の敵も明白に知れ喜ぶ事限りなく、山中左衛門自殺の事を初

めとし今日に至るまでの事を委しく語り、終に兄弟此の辻堂に一夜を明し鶴の夢中の告もあれば先づ由良之進の志ざしたる方を尋ねんと夫れより兄弟打連れて東の方を差して出立に及ぶ。

第十四席

茲に由良之進、筭作の兩人は三州矢矧の邊りまで參りました、丁度此の矢矧の佛光寺といふ寺に釋迦如來の開帳がございまして大層賑はつて居ります兩人此の賑はいを見て若しや敵の立入る事もあらうと思いまするから佛光寺の門前へ參りまして樣々の香具師が出て居りますと中に小僧の力持をして居る樣を彩色の圖に現はしまして夫を入口に掲げ其の傍はらには浪花下り畫の力持と柿色の地に白く染出したる幟を押立て笛

太鼓の音面白く、されば其の前は一層人の山をいたして居りまする、由良之進筭作に向つて由斯ういふ大力の小僧をば武士の子にいたさば成長の後適ばれ物の役に立つべきを斯樣ある香具師の手に下して人の慰さみ物にいたすといふは不便な事にはあらぬか筭如何にも兄上の仰せられる通り惜しき事でござる」と夫より兩人小屋の内へ這入て見物をして居ると鳴物に連て二尺餘りもあらうといふ釣鐘を四五人の男が左も重さうに擔いで夫を鄉臺の正面へ据え口上があつて烟て失へ現はれたのは桃色の長上下紫縮緬の振袖を着したる十才ばかりの男の子其の鐘を自由に持歩き或は肩に乘せなどいたす樣實に大した力量にて見物一同に聲を揚げて賞める由良之進其の子供の樣子を見るに、どうも主人の忰三之助に似て居りまをから心中大きに怪しみ若しや彼の時鶯に攫はれしが幸いにして一